

女海賊野郎

おんな
かいぞく
はいぼく

総

集

編



成人向
コミック



によろがしま

CRIMSON COMICS

成人向
コミック



あの
蛇姫さまが…

ああ
夢にまで見た
光景…



海楼石の手錠で
抵抗できなくなっている
蛇姫さまのカラダが

早く錠を
外さぬか！

今
ここに…！

お前たち
わらわにこんなことをして
ただで済むと
思っているのか！

ギシギシ

さてと…
じゃあ

どうやって
蛇姫さまと
遊ぶか
決めましょうか

…

そうね
フフフ…

ふ…
ふさけるな!

お前たち
何を考えて…!

わらわは
九蛇の皇帝
じゃぞ!

フフフ…

怒った顔も
ステキ…

クスクス

ついに
あの蛇姫さまが

私たちの
オモチヤになる!

女ヶ島

第1話

世界一の美女





どうですか？

私たち
とっても
うまいでしょう？

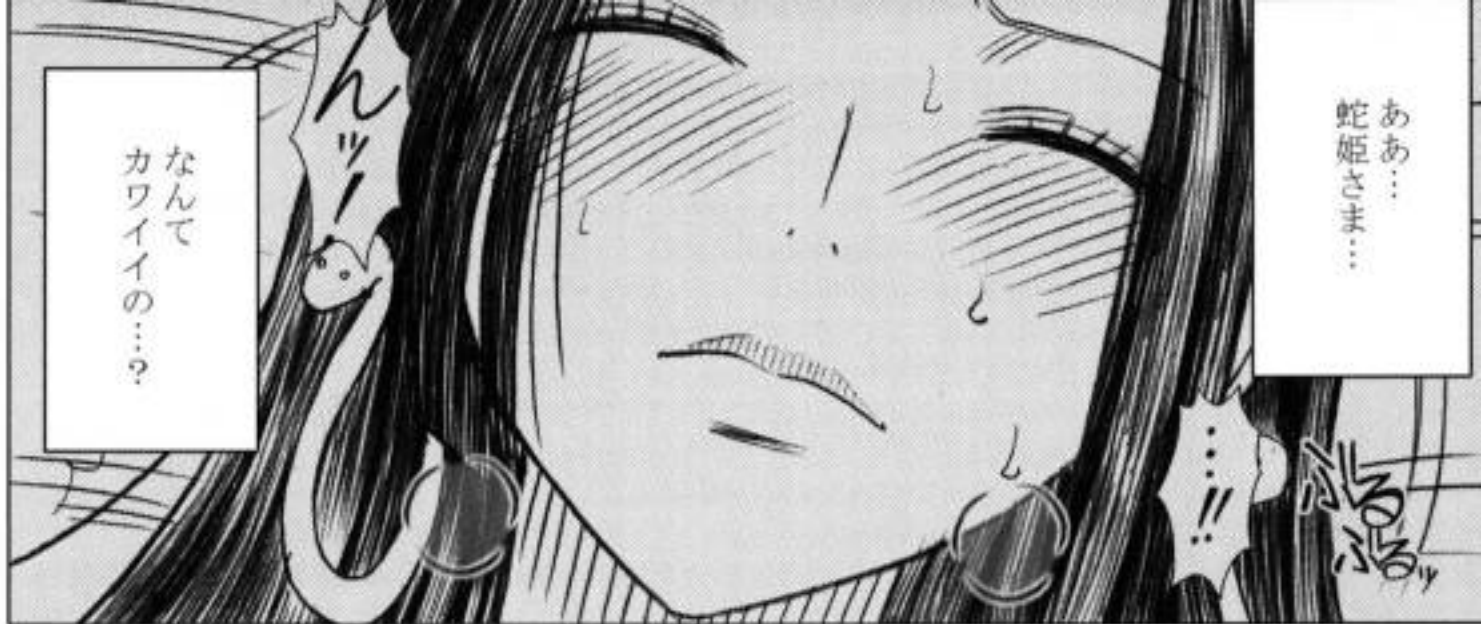
私たち
女ヶ島南部で
マッサージ師を
していますの

私たち
ずっと蛇姫さまのお体を
触りたいって思ってたのに…

蛇姫さまったら
全然
私たちのこと
呼んでくださらないんだもの

ニャラ

ニャラ



ああ…
蛇姫さま…

なんて
カワイイの…？

…!!
ふるふる



もうとつくに
感じてるクセに

感じてないフリなんか
しちゃって…

いいでしょう？
私たちの
テクニク

存分に
楽しんでくださいね

調子に
乗るな！

こ…こんなの
気持ち悪いだけじゃ！

もっともっと
いじめたくなっちゃうわ

カッ

カッ

まあ
そうおっしやらずに



ほら
反応した
フフフ...

ち...違う!
さっきのは...!

何が違うんですか?
そんなにカワイイ声
あけておいて...!

.....ッ!

かあ

あら...?
声出しちゃったことが
恥ずかしかったのかしら?



や...やめろ...

気持ち悪いッ...!

あらあら
無理しちゃって...

こんなに
乳首を硬く勃起
させてるクセに

...ッ!

そんなに
気持ち悪いですか?

んっ!

私たちには
感じる風
に見えますけどお?

ねえ?
フフフ...

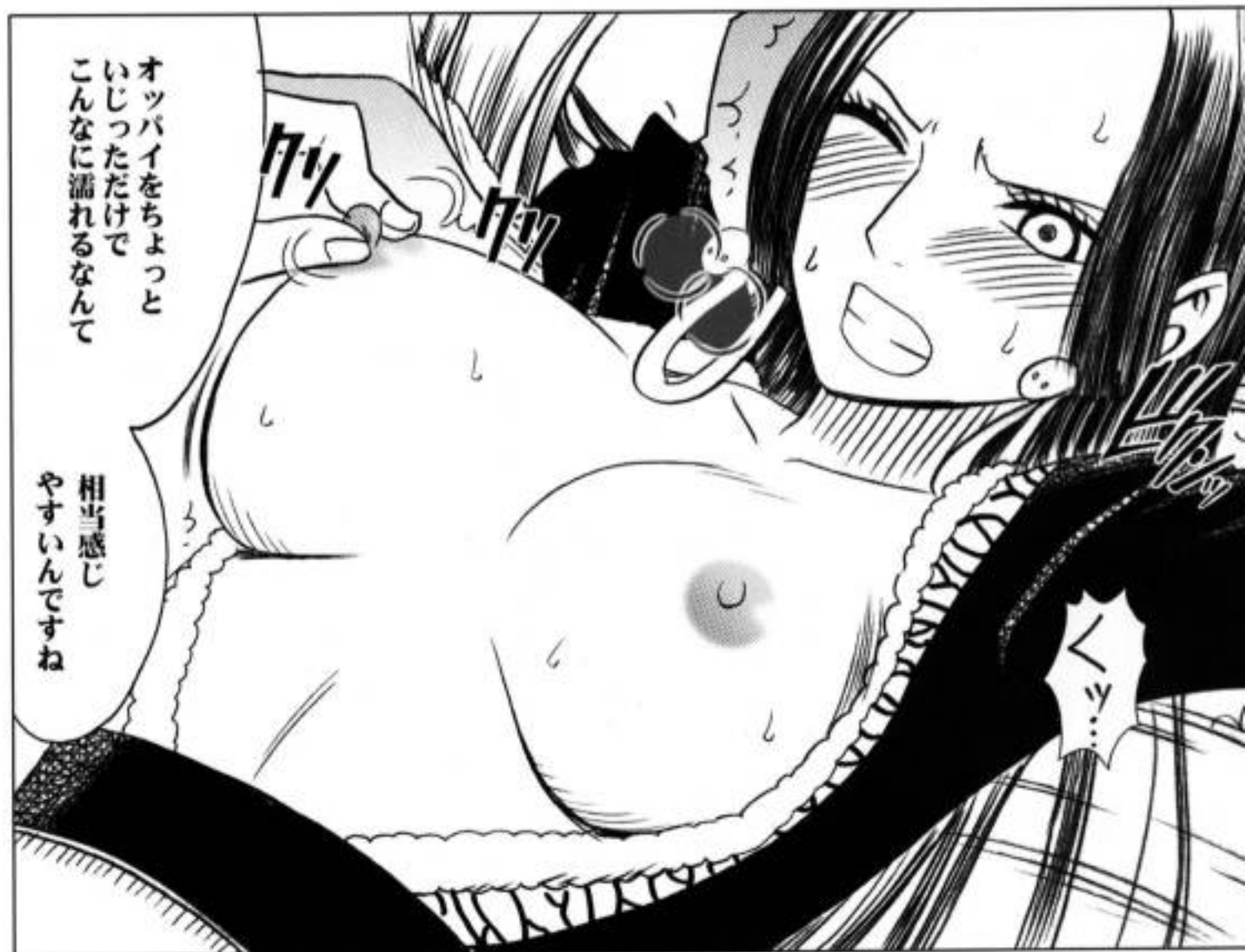
ふうッ!

.....!

まあ
感じてるかどうかは...

ココを調べれば
分かりますけどね

スッ





ひよっとしたら
私たちが
今まで遊んできた

どのオモチャよりも
敏感かも？

ズリ
ズリ

世界一敏感な
カラダでもある
なんて

世界一美しい
蛇姫さまは

ステキだわ

ツリ



ああっ！

やっ！

やめぬか！



もつとよく
見せてもらい
ましようか

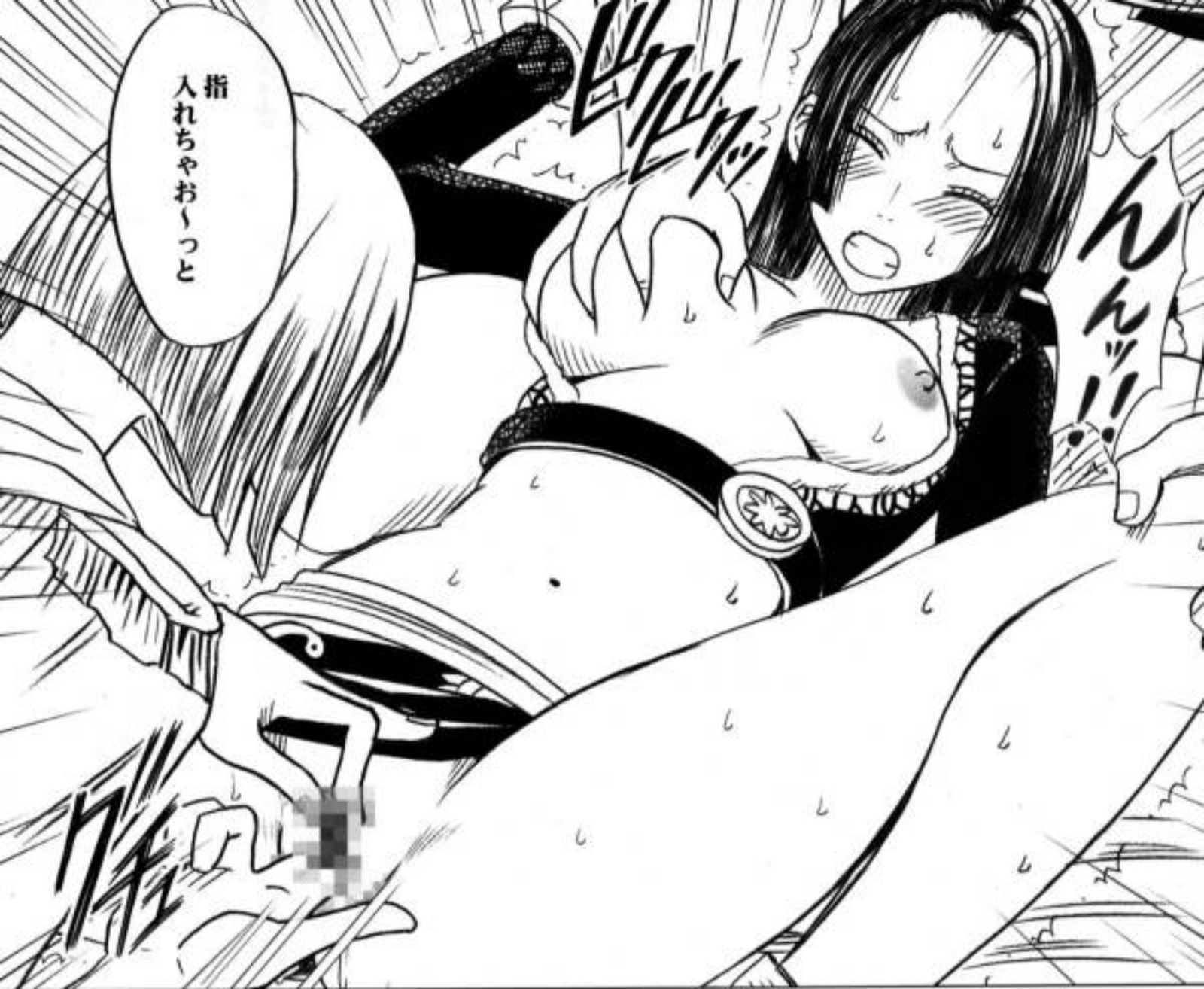
蛇姫さまの
アソコ



み…見るな！

まるで
少女みたいなの
マ●コね

まあ
カワイイ



指
入れちやおっつと

んんッ!!

クワッ

クワッ



拒絶するかのよう
ですね

ヤッ...!!
ヤッ!!

クワッ
クワッ

まるで
ナカに入ってくるモノを
すべて



処女なのか
どうかは
分からないけど...

まるで処女みたいに
キツイわ

クワッ
クワッ



これから
私たちが
ゆっくり

快感でほぐしていつて
あげますよ

ブルッ



どうですか？
イキそうですか
蛇姫さま？

だ…だから
何度も言っておろう！

ぜ…全然
気持ちよくな
ないわッ！

ん!!

ブルッ

ちゅっ
ちゅっ



気持ちイイかどうか
なんて
聞いてないですよ

気持ちよく
なってることは
もう分かってるん
ですから

気持ちいいかどうか
じゃなくて

イキそうか
どうかを聞いているんです

あぁ!





あの
蛇姫さまが
ついに



私たちの手で
イカされるのね……!!



ああ
蛇姫さま……!!

そんなに
カラダをビクビク
させて





女ヶ島

第2話

ホルホルの実

フフフ…
蛇姫さま

これが何だか
分かりますか？

これは
とある悪魔の実の

能力を抽出したもの
なんですよ

ホルホルの実

ホルモンを自在に操る
悪魔の能力

その能力は
男を女に変えることも
できるとか

何をする！
や…やめろ！

コレを使って
面白いことを
してあげますよ

ズッ

ドキッ





最高に
いい表情だわ

フフフ…
いいわ
その顔

絶望と羞恥が
入り混じった
その表情



アハハハ!

すっごく
いやらしい体
になりましたね
蛇姫さま

な…何を
したのじゃ!

も…
元に戻せ!





早く戻りたいの
でしたら

何度も
射精して
男の成分を
放出するしかありません



すぐに
出ちやい
そう



じゃあ私が
しこくから

あなたはアソコを
責めなさいよ

ウフフフ…
いいけど
そんなことしたらー

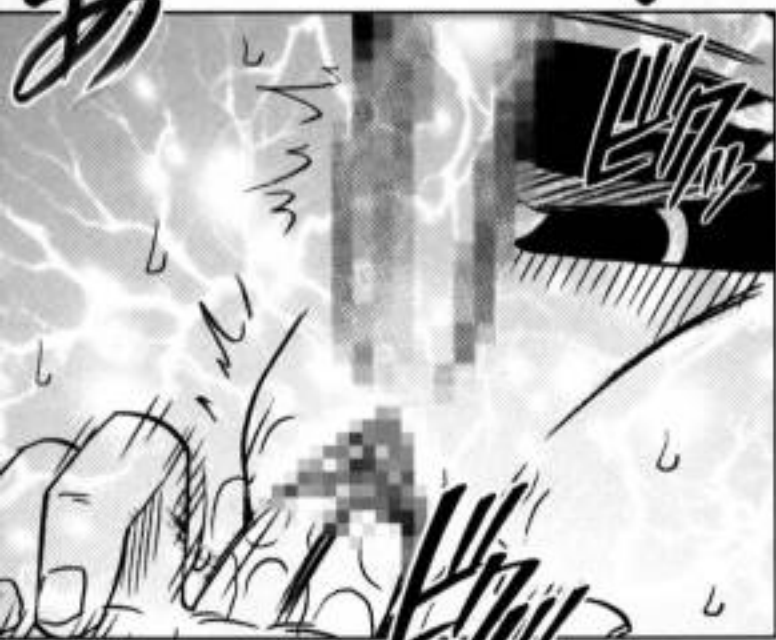


アソコも
敏感でしたけど

コレになっても
やっぱり敏感さは
変わりないですね

この調子だと
一発目は
すぐにでちやいそう







未知の快感が
ちよつと怖かったの
かしら？

あうら〜



も…も…も…
やめろ…！

きじ〜



ホントに
かわいいですね〜
蛇姫さまは…

でも
まだまだ

もっと出さないと
コレ
無くなりませんよ〜



ほら
暴れないで
くださいよ

そんなに
暴れたら
私たち
もっと興奮しちゃいますよ
フッフ

ああ…

なんて
かわいいの？

へんなモノ
はやされて

こんな
屈辱的なカラダで
イカされて
戸惑って…

でも敏感だから
すぐイキそうになって…

ほらほら
もつとがんばって
ガマンしないと

また
イカせちゃうわよ…!!







追い込む……!

……アッ……



ああ……
その顔
サイコー



何度でも
イカせたくなっちゃう



ここから



ああ
ああ
ツッ
あ
あ



ウフフ…

また出ちやいましたね
蛇姫さま

ちよつと
しほんできた
みたいですよ

あと1回くらい
出せば
元のカラダに
戻れそうですね

じゃあ
このまま
休まずに
続けちやいましょうか

ま…待て…!!

そんなに
続けて…!!

あら…
少し休ませて
欲しいですか?

ムリもないですよ

イッた直後で
超敏感になつてる
ココいじられると
ヤバイですよ

…ツツ!!

くっ!!

でも
やめない

やっ…!!

な…何を…!!



フッフ...

こんな格好
したことないでしょう
蛇姫さま

ああ!

ばっ



手も足も出ず
股間を一方的に
いじられて...

いつもの威厳が
まるでないですね

んん!!

ククク

やっぱりココ
超敏感になってる
みたいですね

…!!

んっ…

私たちも
遊びで
このクリチ●ポを
試したこと
あるんですけど

イッた直後は
そっと触れるのもムリなくらい
敏感になりますものね

私たちが
ムリだけど

海賊女帝である
蛇姫さまなら
耐えられますよね

この
快樂地獄
クスクス

もうすぐ
最高の絶頂を
迎えられるそう…

私も
お手伝いしますわね



あッ!!

ほあ

ほあ

ギョッ

ありとあらゆる
感じる部分を

一度に
責められて

それも
体みなく
イカされて

ちゅっ

ちゅっ

ほらほら

また
イキそうですね

ああ!

ふん...

ちゅっ
ちゅっ





ウフフ…

まだ
イカせませんよ

そう…
もっと…

ほあ

ほあ

ほあ

クスクス…

ここからが
本番

もっとと蛇姫さまの
かわいい顔が
見たい

もっとと蛇姫さまが
戸惑う姿が
みたい

……!

もつと
蛇姫さまを

これでもう

手も足も
ピクリとも
動かせない

どんなに
気持ちよくても

カラダをよじって
快感を逃がすことも
できない

いじめたい……!

……!



蛇姫さまは
私たちの玩具です



イカせるも
イカせないのも



私たち
次第



あぐっ



カラダの動きを
封じられて…

クワ
クワ

しかも
股間には望まぬモノを
生やされて…

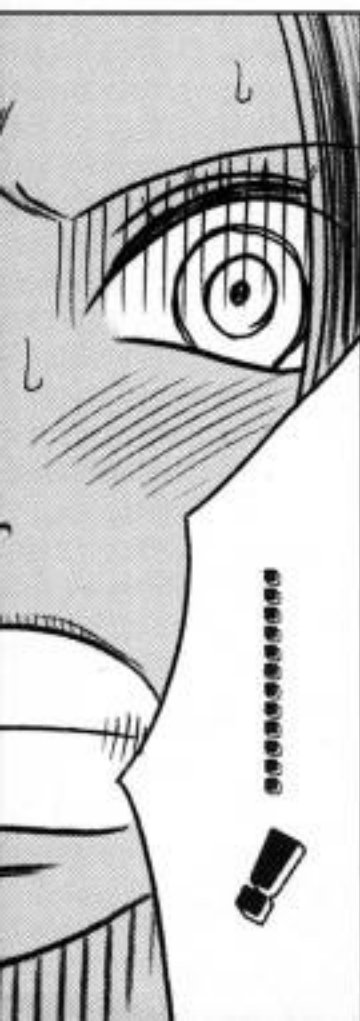
快感を
1番もどかしい状態で
コントロールされて…

ピョッ
ピョッ

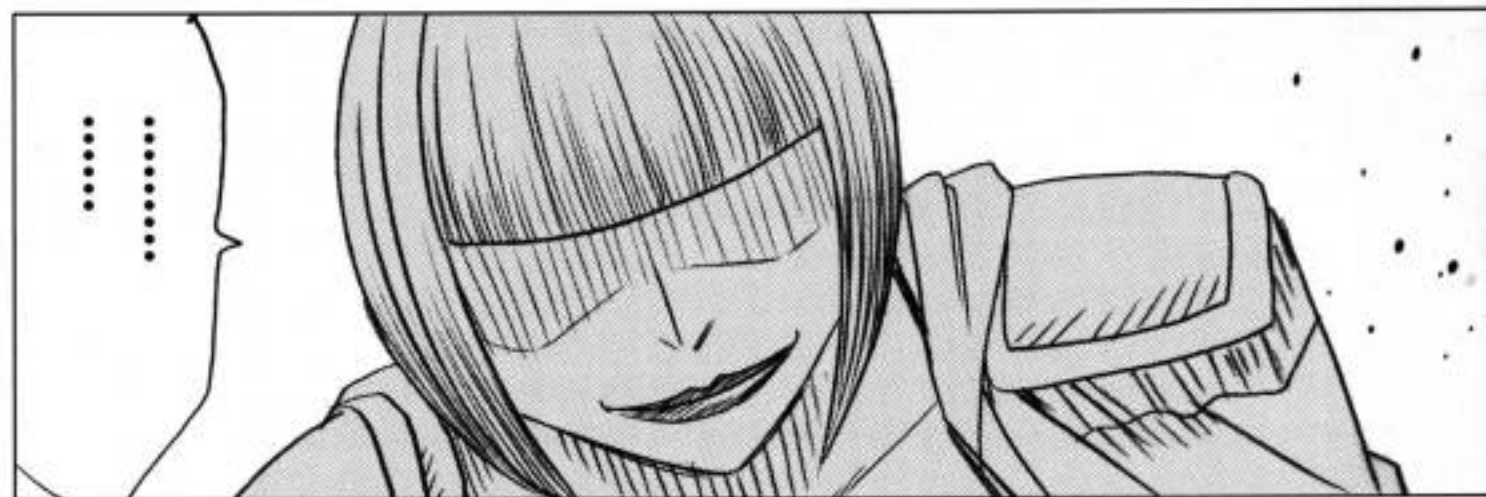
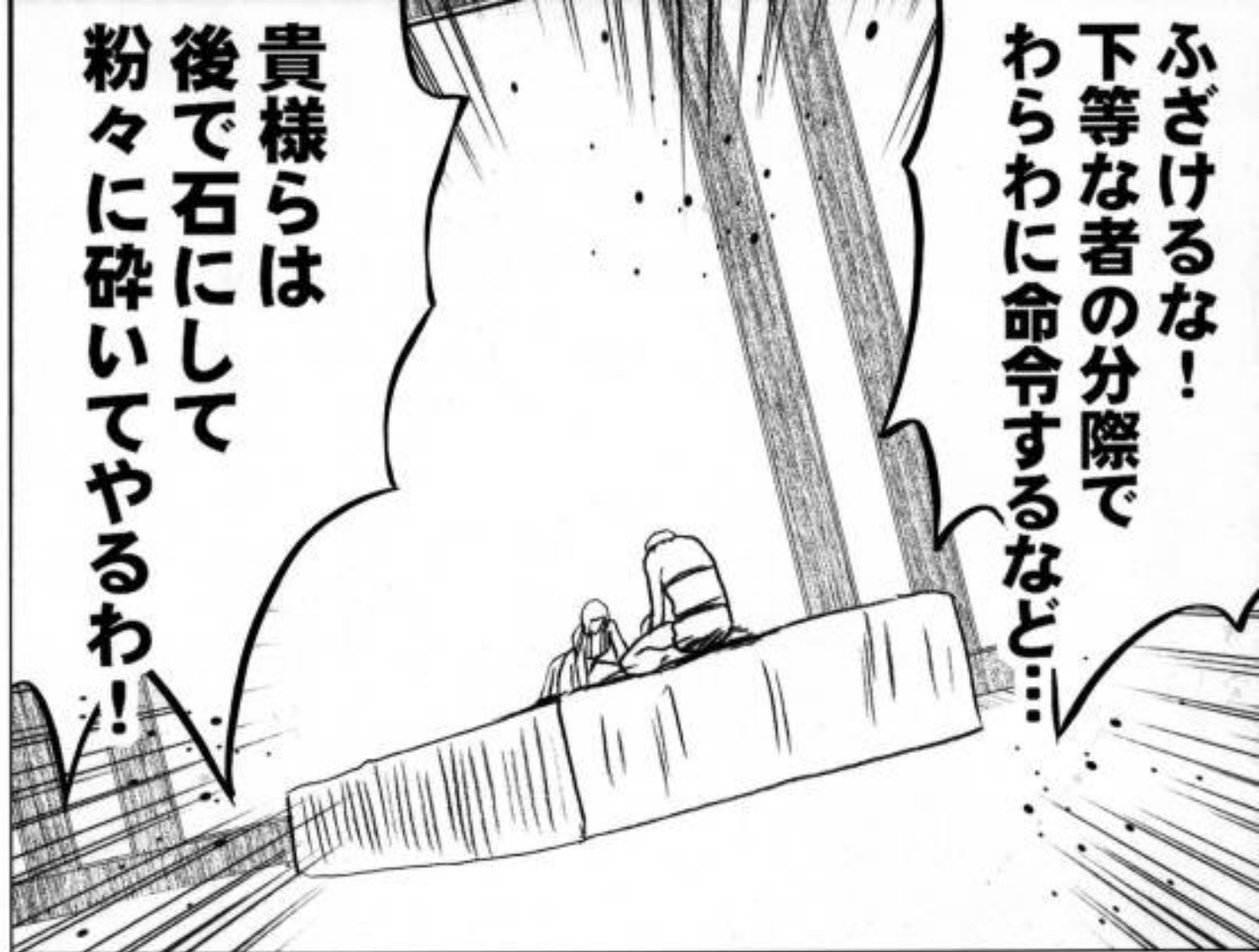


早くこんな屈辱から
解放されたいでしょう

だったら
言うしかありませんね



おねがいだから
イカせて
ください…って



フッフ…

そう…

それでいいの！

ちゅっ

そういう反応を
聞きたかった…！

ひゅっ

はっ！

あッ！！

んっ

それでこそ

私たちの理想とする
玩具…！！

んっ
はっ
はっ

くッ…

…！！



クッ
クッ

!!!

クッ

んんッ!!

ちよつとや
そつとで
随ちるようなら
つまらない

ちゅっ
ちゅっ

だって
私たちは今…

クッ

クッ

蛇姫さまを
犯してるんだもの……！



クワッ

クワッ



クワッ
クワッ



「アッ」

「アッ」

女ヶ島

第3話
轉換

フフフ

起きてください
蛇姫さま



良かったですね

蛇姫さまの
カラダはもう
元に戻っていますよ

その
かわりに…





今度は私たちが
ホルホルの実際の能力で
男になりました



お前たち
何を…!!

なっ…!!?



もちろん

私たちが
このカラダになった
理由…

分かりますよね？

私たちが
男根を
生やした理由は
ひとつ…!!

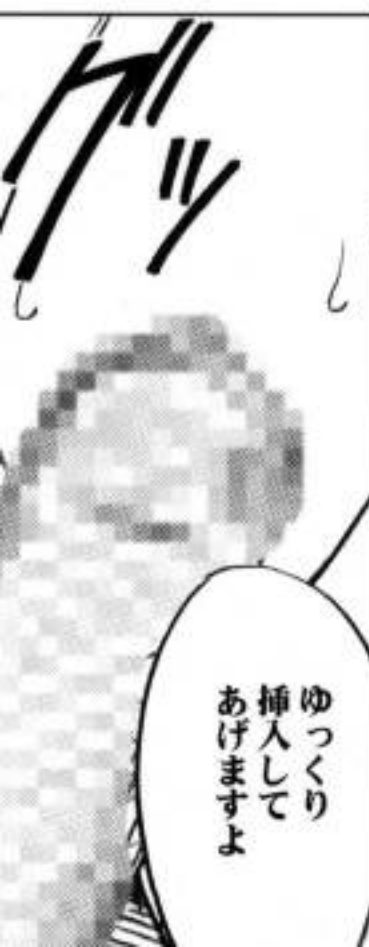
それは—



蛇姫さまと
ひとつになるため！

ドキッ

バッ



ゆっくり
挿入して
あげますよ



キツキツの
オマ●コですから



そんなもの！

や…やめろ！



ドクッ

ドクッ

いやあ
ああああっ!

ドクッ





ゆっくりと
自分の体に
男のモノが
入っていくのを

ブルッ

眺めて
いてください

やッ…

やめろッ！

いやッ…

あッ…！

さあ
蛇姫さまの
女性器で受け入れて
ください

ほら
先つちよが
入った

これが
「男」ですよ
蛇姫さま

「男性器」を…！

ああッ！



あああああ!

あああああ

あああああ

あああああ

あああああ



ラァッ!!

アァッ!!



ズッ
ズッ
ズッ

一気に奥まで
突きますよ!



入りましたね

それじゃ…
ここから



アァッ
アァッ
アァッ

!!



最高だわ……!

これが…

蛇姫さまの
ナカの感触…!



蛇姫さまも
すごく感じてる……

肉棒でナカをえぐって
支配する……!!

これが、男の
快感……!!



どうしたんですか
蛇姫さま

そんなかわいい声で
あえぐばかりじゃ
なくて

いつもみたいに
キツイ言葉を
投げかけてくださいよ



「男子禁制」
女々島の
皇帝が

男のチ●ポに
負けて
よがってちゃ
ダメでしょう？

アッ

こんなことじゃ
威厳が
なくなりますよ



わらわを
どこまで愚弄すれば…



お前達…!



ダメでしょ
入れている最中に
そんなに乳首まで
触ったら…

蛇姫さまは
敏感なんだから
すぐイツちやい
ますよねえ？

フッフ…



もう限界
なんですわね

ちよつと
ヤバそうですわね
蛇姫さま

後ろから
抱きしめてるから
分かりますよ



はら
はら
はら

胸を揉むたびに
カラダが
はじけそう

チキ
チキ



もうすでに
蛇姫さま

今まで何度も
私たちに
イカされちゃっ
ますけど

男のチンポで
イカされるっていうのは

ちよつと
意味合いが
違いますよね

カンタンに
男に屈しないで
くださいよ
クスクス

んんん!!

…って
言っても…
もうムリ?

じゃあ
イクのと同時に
私も出しますよ!





私は
バックから

突かせて
もらいましょうか



フフフ…
次は私の番ですよ

もう気持ちよすぎて
声も出せないみたい
ですね

サイコーでしたよ
蛇姫さまの中…

んん
んん
!!ん

んん

んん

んん







驚きましたよ
蛇姫さま

私たちがみんなを
騙してたん
ですね

ゴートンの目ざんつ
ウソ

ピッ
ピッ

ピッ
ピッ

ピッ
ピッ

クワッ
クワッ

あ...?

あ

あ



ホントはこんな
恥ずかしいモノが
あったなんて

ん



クワッ
クワッ

んんん!!



あれ？
結構 背中も
感じるんですね

マ●コよりも
恥ずかしい背中

意外とココが
イチバン弱いんじや
ないですか？



んんッ!!



背中を触れば
触るほど
締め付けが
スゴクなってますよ





.....!
!?



手を後ろに
引っ張らせて
もらいます



あんまり
暴れると

メチャクチャ奥まで
突き刺さっちゃい
ますよ



これでもう
前には逃げられません



ズ
ズ

たまらない
たまらない

ああ

あああ!

パッパッ

これだけ
犯してるのに

もう
いつまでも
犯し続けたい

まだ異物を
拒み
押し戻そうとする
膣壁…

それを
押し割って入れるたびに
ビクビクするカラダ…

パッパッ

パッパッ

あああ!!

ククッ
ククッ

これからもずっと

蛇姫さまは
私たちの玩具……!!

嗚
嗚







!!
!!
!!

!!
!!
!!




ボニーの

敗北


CRIMSON COMICS

成人向
コミック



「新世界」に入った
ボニー海賊団は
海軍の襲撃にあった

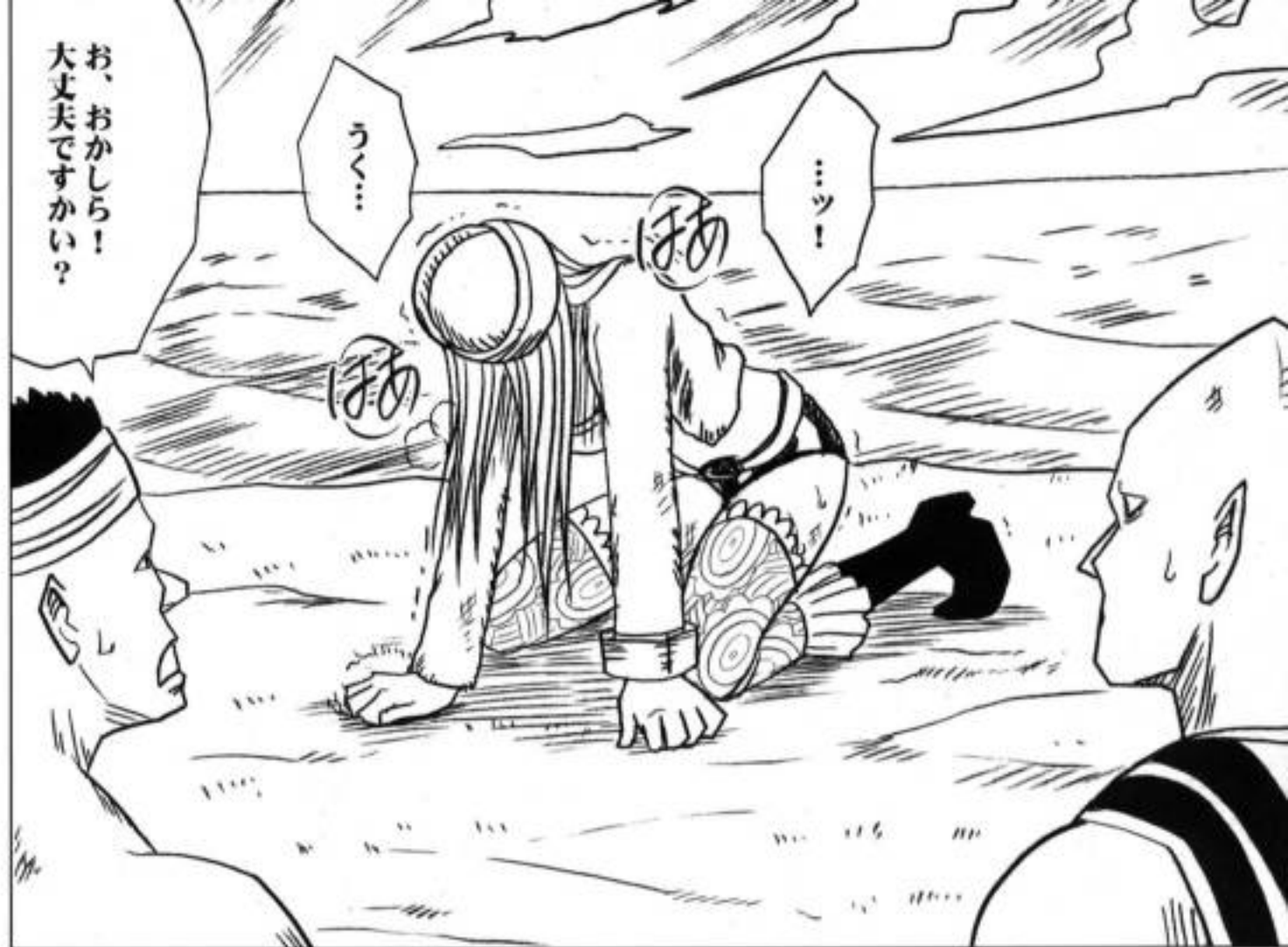
海軍の巧妙な作戦と物量に
対抗する手段はなく
命からがら逃げることしか
できなかった



完全な敗北…

大量の部下を失い
しかもボニー自身も戦いの最中に
海楼石の錠を
つけられてしまっていた

なんとか
とある燃える島に
上陸したのだが…



そして部下たちの中で
何かがはじけた……

くそっ……!!
外れねエ……!!

おい!
聞こえてねエのか!

さっさとしろって
言ってるんだろ!



海軍の攻撃から
命からがら逃げ出して
なんとかこの島まで
たどり着いて――

その緊張感と興奮は
まだ精神に焼き付いており
目の前の女の肉体に
強く反応した



ボニーの敗北

第1話

「裏切り」



お前達…!!
タダじやおおかねえ
からな!

ククク…
わかってるん
ですよ

威勢が良いのは
口だけってことばね!



「これ以上」って
どうすると
怒るんですかねえ?

怒ると
何をしますか
船長?

んッ!

はッ!



こんなチャンス
二度とねえよな

そうだな
ツイてるぜ
オレたち



やめっ…
やめろッ…!!

これ以上やったら
マジで怒るぞ!



テメエら
殺されてえのか！

そんな
へろへろの状態で
言われても
何も怖くありませんよ

こうなつちやえば
一億越えの
海賊ボニーといえど
ただの女つてところ
ですかね？

ハハハ！
ちげえねえ！



ハッ！
後で…か

もうアンタには…



今は勝てるからって
いい気になってんじゃ
ねえぞ！

こんなことして…
後でどうなるか

後も先も
ねえんだよ!

や...やめろっ!

お前達みたいなの
下衆が見るんじや
ねエ!

ばっ

うるせエよ

ククク...

痛っ.....!

まあ落ち着けよ
どうせ船長は.....
いやこの女は
何もできやしないんだ

そう思うと
この滅らさず口も
可愛いもんじやねえか

そうだな
男たるもの余裕を
もっていねえとな



じやあいつが
ひんじ

クッ

クッ

紳士的に
交渉するか

んッ!



おねがい
しますよ

なア...
船長



一発やらせて
くれませんかね?





そろそろ
コッチのほうも
味見させて
もらいましょうか



やッ……



いいですか
触りますよ
船長

ちよっ……!

ダメに決まってる
だろうが!

スッスッ

おっと……
反応してるじゃ
ないですか

クク……
感じるんですかい？
船長？

ば……バカにするな！
……

んんッ！！

船長も女だったって
ことですかね？

ビクッ

ビクッ

スリ
スリ





くそっ……「ソイツら」
どうしちゃったんだ！

「こんなこと」
やっつては場合じゃないの！



さっきから「こ」を
いじめると
やけに反応がいいな

ひよっとして
乳首
弱いんですかい？



指も入れませぜ？

だ……
ダメだ……！

ああっ！

アールのくっ...

おーおー
よきそうな声
あげちゃって

んっ...

ちゅっ
ちゅっ

はぁ!!
ズッ
ズッ

なんて...
我慢してるのに...
声が...



おお
食べるときはバカみたいに
大きい口開けてるのに

下の口のほうは
キツキツじゃないですか

アール
アール



感じてるときの声は
普通の女の子
みたいですね
船長

バ：バカ！
テメエらの
ヘタクソな愛撫で
感じるわけ…

んっ！



あはあ！！

聞いたことありますよ
海楼石をつけられた
能力者は
すべての抵抗力がなくなるって
快感に対しても

んっ…

オレらみたいな
ヘタクソにも
イカされちゃうんじや
ないですか？

船長が
すんなり
やらせてくれてたら
こんな乱暴なことは
しなかったのに

ふざけんなっ！
誰がテメエらみたいな
雑魚と…

ああっ！

ほらほら

カッ
カッ

カッ
カッ

ここを
こんなにしておいて
まだそんな減らず
口を叩くんですか？

嗚
嗚

嗚
嗚

ん……く
あああ！

いやあ……！！

ほら
もうイク

ククク

く……！！

イッたら
ヤラせてくれ
ますかね？

パロ

ちゅっ
ちゅっ

パロ

嗚
嗚

はあっ！

調子に
乗りやがって……

ああっ！

ああっ



ボニーの敗北

第2話

「敗北を認めるしか」

部下たちは
今までたまりにたまった
不満や欲望を
すべて解放するかのよう

ポニーの体を
むさぼった



へへ……
大分おとなしく
なってきましたね



ほんの少しだけでも
いつもの力が出れば
こいつらなんて……!

ブツ殺すぞ!

くそっ!
黙れ!



まあ そのまま
大人しく
してくださいよ

乳首はもう
こんな硬くなってるし



ここはこんなに
なってるんで
すからねえ



もうちつと
素直になつてくれたほうが
こつちとしても
嬉しいっすね

いや
オレはこういうのも
案外好みだけどな

ガハハ!
オメエはほんとに
変態だなあ!

フィル
フィル

はあ
はあ



やめろ……

フィル
フィル



はあ!!

フィル



ククク……
ここがそんなに
イイんですかい?

はあ

船長のその
悔しそうな
表情たまんねエ



くそっ…
手錠のせいで
力が入らない…!!

ガズン
ジュクジュク
できるのか!?!



ダメだ…!!
クッ
クッ
クッ
クッ
クッ

んッ!

くッ…

何でこんな
奴らに…

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ



何度も
イカされなきゃ
ならねえんだ!



それから
何十分間も
ポニーの体は
弄ばれ続けた

「後で絶対に
殺す！」

そう叫び続け
気丈に振舞う
ポニーだったが

海棲石の手錠が
ある限り
反撃することは
不可能だった

思い通りにならない体…

自分の海賊団が
崩壊したという事実…



んんんんん
!!ん

そして部下たちに
何度もイカされるとい
う
屈辱…

それらが焦りとなって
一億越えの女海賊
ボニーのプライドを

一枚一枚
剥がしていった



部下たちのオモチヤに
成り下がって
数時間……

イカされること
十三回――

決して
完全にあきらめた
わけではないものの

ようやくポニーは
自らの敗北を
悟った――



ま……待て……!
分かった……一回……

一回
やらせてやるから……!



おや？

ついに
やらせてくれる
気になりましたア？



いつも
食べることしか
頭に無い
バカな船長でも

ようやく今の状況が
分かってきましたか？

でも
言っときますけど
一回ヤツたくらいじゃ
終わりませんよ



な………？

ス……ス……ッ……？



この後
船長は

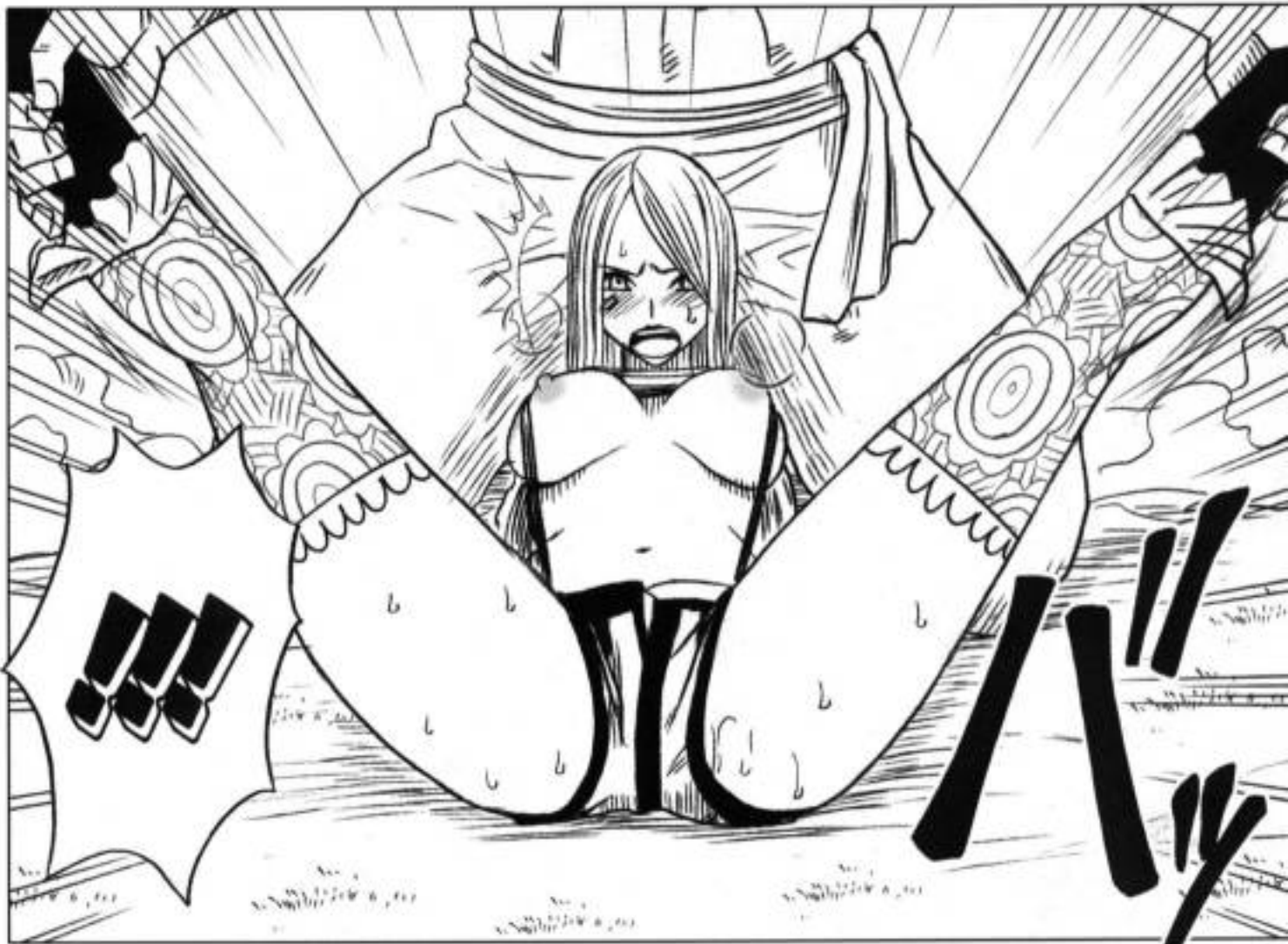
オレらの
ベットになるん
ですからね



フザけんなツ………！！
絶対に
許さなねエからな！

覚悟しとけよ！

回復したら
お前達なんか！



自分の言葉くらい
守ってくださいよ……つと！

あああ
ああッ!!!

ズッ
ズッ
ズッ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ



んんッ!!

んんッ!!



おお……ヒダが
絡み付いてくるみたいで……
船長のココは最高っすよ!

ま……
待て……!

これ以上
激しく
されるとッ……!



待つなんて
無理ッスよ!

こんな具合の
良い穴で
ちんたらしてられや
しませんって!

他のメンバーに
悪いなあ

オレらだけ
こんなオイシイ
思いさせて
もらっちゃって

ん
ッ!

…!!

オレなんか
船長のカラダ目当てで
この海賊団に
入ったからなあ

哇
哇
哇

く……テメエら
本気でそんな……!

うるさいッスよ
船長

もうテメエらは
部下でも何でもねエ……
絶対に――

ん!!

ホントに
デカイ口叩くクセに

下のクチは
ちいせエなあ

あああ
あああ

哇
哇

哇
哇

哇
哇



ヤベエ…
船長の
良すぎて

もう
ガマンできません

もう
出ちまいそう
ですよ



海の上で女日照りが
続いてましたからね……

濃くてドロツドロのが
出ますよ……!!

やめろ!!
ま……まさか……!!??



ナカに出すのか!??

それだけは
絶対にやめ

ほら
行きますよッ!



あああ
!!!

バツバツ

バツバツ





マジで
サイコーでしたよ
船長



後で
絶対殺す!



いやオレだ

さあ
次はオレだな

まあそう焦るなよ
この女はもう
逃げられやしねえん
だからよ

やっ...
やめッ...!



何だ？
犯されてたのか？

誰かと思えば
ジュエリー・ボニー
じゃねえか



お前達……！！



こりや
とんでもない場面に
遭遇した
みてエだな！

ゼハハハ！

次々と襲いかかる
淫らな畏…!



初めての衝撃に翻弄される
天才退魔士少女…!



フルカラー同人誌

退魔士

カグヤ

DEVIL EXECUTIONER KAGUYA

発売中

ボニーの敗北

第3話

「揺さぶり」



情けねえじゃ
ねえか
ジュエリー！
ポニー……！

仲間裏切られて
犯される
なんてな

ハアッ！

ハアッ！

おめエみてエな
小娘によく
"億"って賞金が
ついたもんだ

"新世界"は
選ばれた
強者の海だ！



仲間にするにやあ
弱くて
要らねエが

どうだ
おれの女になるなら
連れてって
やってもいいぜ

この先の
海へ……！
んん？

……つ
ザケンじや
ねエよ！


ヒゲ
ブタがア！

どわ
！！

ギヤッ
ハッハッハッ！

調子にのって
海棲石の手錠を
外すから
こうなるんだ！

しょうがねエだろ
へろへろの女と
やってもつまんねえ
からなア！




おめえは
だめだ
下品でいけねエ

女は品が
大事だろ？

下品なのは
仲間達だけで
充分だぜ！



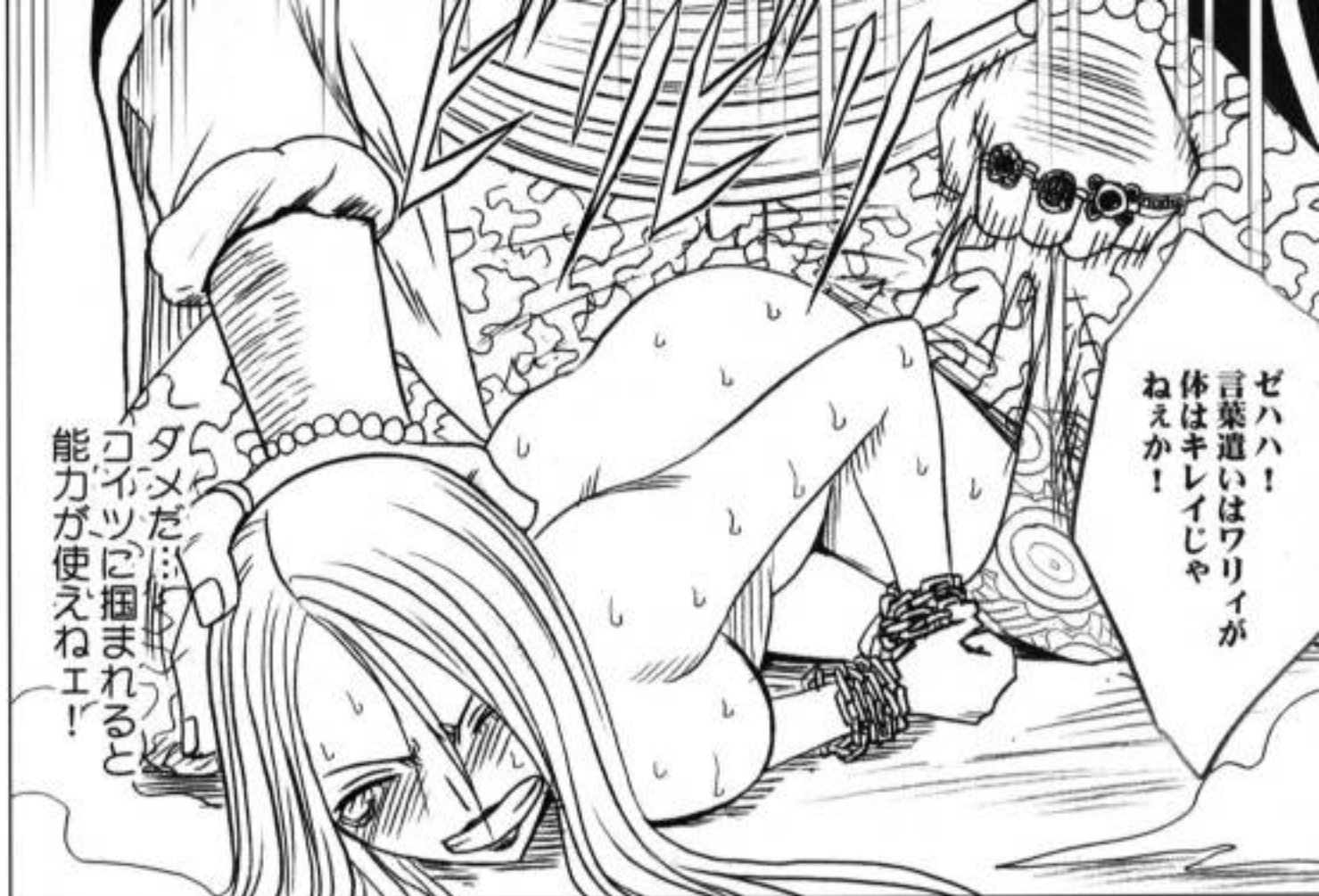
なアツ！



予定通り
おめえは海軍に
引き渡す！

軍艦一隻と
交換だ！

やつ…
やめろツ！



ゼハハ!
言葉遣いはワリイが
体はキレイじゃ
ねえか!

ダメだ...
コイツに掴まれると
能力が使えるエ!



それにもう
体力も限界...

くそっ...!

このまま
黙ってやられるじか
ねえのか...!!?



まだ海軍がくるまで
時間がありそうだし

どうせ
おめエみてエな
賞金首は
一生監獄だろうから

その前に
サイコーの快感を
プレゼントして
やるぜえ?

ブウーン

お…おい！
ちよつと待て！

お前何を…！



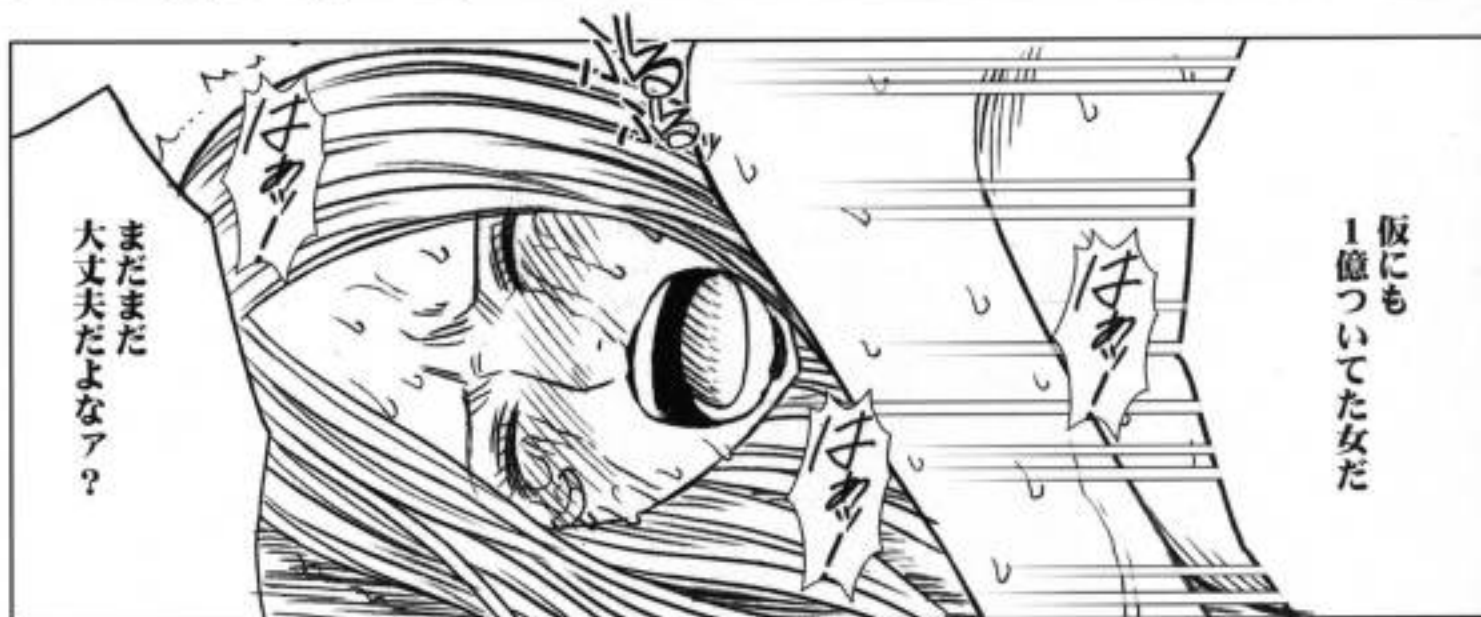
なつ…何だこれは…!!

体内のすべてが振動するツ!

子宮が震えて…!!

あああ
あああ
ツ!





もっと可愛らしく
上品に
やめてください。って
言うんだったら

やめてやっても
いいんだぜ？

ズッ

言わなけりや
もう一回だ！

...

ズッ
ズッ
ズッ

やッ...
ま...待て...!

ズッ



体も脳もすべてが揺れて……!!



何なんだ!?!?これは!



快感に逆らえない!



あああ
あッ
!!

ア
ア
ア
ア
ア



この振動



うはア

やっぱりコレ
サイコーだな



おめエの
カラダ全部が

おれを気持ちよくする
ためだけに
存在するかのような

この圧倒的な感じが
たまんねエ

んんんん
!!ん

んんんん

お前達……!

絶対に
許さねエからな!

ほら
もう一発行くぞ?

やめッ……

もう
やめろッ……!

ブワァーン

いやッ……!

あああッ!

ウイッ
ハッハー!

あとでオレにも
やらせてくれよ!

あ……ッ!







日本のゲームは美しい。

蒼い世界の中心で 完全版

セグアVSニンテルド！

コンシューム大陸の占有率をめぐるハードな戦争！

公式WEBサイトにて週刊連載中です。
毎週金曜日に更新しています。
趣味でやっているのでも全話無料公開です。

「蒼い世界」「セガキュー」などで
検索したら見つかると思います。
<http://oab.sakura.ne.jp/gia/>



ボア編

ん〜♪
いいわね〜
キレイなカラダに
縄が食い込んでるのは〜

まさに極上の
カラダよねえ……

「ん〜♪ あんたがインベルダウン大脱獄のきつかけを作った強本人なのはわかってるのよね〜」
縛られて動けないボア・ハンコックを前に、獄卒長サディは長い前髪の下で目を光らせた。

「わらわは知らぬ。」

あのような大事件をわらわ一人の力でどうにかできるわけがなからう〜
縛られていてもハンコックは強気だった。

サディのどこにあるのかわからない目を睨みつけ、見下している。

「ん〜♪、あんたのその目、気に食わないわね……」

少しイライラした調子でサディがつぶやく。

しかし、そのイライラはすぐに彼女のなかで

痺れるような熱気と興奮に変わっていく。

「まあいいわ〜。今回の尋問……」

……いえ、尋問を任せられたのはこのサディちゃんだからあ〜♪
手にした鞭をしなければ、自らの唇を長い舌でべろりと舐める。

「ん〜♪、いいわね〜。キレイなカラダに縄が食い込んでるのは〜」

「……ッ」

サディは動けないハンコックの周囲をゆっくりと歩き回り、

その股体をさまざまな角度から観察する。

「まさに極上のカラダよねえ……」

うっとりときき、ちろちろと舌を出す。

その仕草は姪姫よりもっと姪らしい、

陰湿で淫蕩なものだった。

「さっさとこの縄を解かんか！ 無礼じやぞ〜！」

まだ本人もはつきりと意識できているわけではない。

だがハンコックの本能は、言い知れぬ不吉な予感を抱いていた。

言葉にも若干焦りが滲んでいる。

「ん〜♪」

それを見逃すようなサディではない。

鼻歌とも含み笑いともとれぬ楽しげな声を
唾液でてらてらと濡れた唇の隙間から漏らした。

良い
ニオイね〜……

まさかこんなに
美しくて高貴な
海賊女帝さまを
拷問できるなんて

サディストとして
最高の悦びだわあ♪

やめろ！

貴様ごときが
わらわの体に
触れていいと
思っているのか！

「良いニオイね〜……」

背後にびったりと張り付きハンコックの耳を舐め上げる。

そして獲物の脈動を確かめるかのように、首筋に唇を這わせた。

サディはいきなりハンコックの服に手をかけ、一気にずりおろした。

全く躊躇のないその行動にさしもの蛇姫も一瞬言葉に詰まる。

「やめろ！ 貴様ごときがわらわの体に触れていいと思っているのか！」

だがサディはそんな言葉など全く気にせず後ろから豊富な乳房をもみしだく。

まるで好奇心旺盛な子どもがするようにその柔らかさを確かめる。

「く……！」
鞭の柄で胸の先端を突かれる冷たい感覚に思わずハンコックは声を漏らしていた。

「ん〜い〜♪♪」
サディは上機嫌になり、さらに強く柄を押し付ける。

「い……痛……ッ！」

「痛いときもあって当然よ。これは拷問なんだからあ〜」

言いながらまた首筋に吸い付き、今度は浅く歯を立てる。

肉食獣が獲物を前にしたときのように、

その口内は熱く粘った唾液で満たされていた。

ハンコックの首筋にその唾液が

どんどん分泌されて熱くふやけてしまいそうなほどだ。

「う……くう……！」

不快、というよりはそこから直接毒でも

流し込まれてしまいそうな感覚にハンコックは身震いする。

首筋に歯を立てられるということは、

生殺与奪の権を奪われているということも意味した。

「まさかこんなに美しくて高貴な海賊女帝さまを拷問できるなんて

サディストとして最高の悦びだわあ♪」
首筋から顔を上げてサディは囁いた。

んっ

やめて欲しかったら
さっさと
インベルダウンに来た
本当の理由を吐けば？

や…やめろっ…！
んっ…くっ…！

でも
言わなくても
いいのよ♪

そしたら
この楽しい拷問を
まだまだ続けられる
から♪

「お次は前から堪能させてもらおうかしらあ♪」
サディが回り込んできて、ハンコックの胸に吸い付いた。
「う……くあ……！」
絶妙に歯を立て舌をうごめかせながら、執拗に乳首に刺激を与える。
乳輪をすっぼりと唇で包み、
またあのベトベトで熱い涎をたっふりと擦りつけて乳首を食む。
熱い唾液が酸のように思えた。
胸の先端が溶かされてサディの口の粘膜と溶け合っていくような
何ともいえない感覚――。
「や…やめろっ…！んっ…くっ…！」
「んっ♪ やめて欲しかったら
さっさとインベルダウンに来た本当の理由を吐けば？♪」
「く、うああ…！」
サディが乳首に軽く歯を立てる。
「う……あ、はあ、あく……！」
そして上下のあごを左右に揺らし、
歯を小さなこざりに見立てて乳首を擦り上げる。
くすぐったさと痛痒さのちょうど中間にある絶妙な感覚。
初めての感覚にハンコックのあごがあがる。
「んっ…！いいカオするじやない」
サディの腕が伸び、ハンコックのあごを乱暴につかんだ。
間延びした声とは裏腹に手の動きは暴力的に口内に侵入していく。
指先でハンコックの口腔をこすり、舌をつまみあげる。
「ん……く、うううむ……！？」
「でも言わなくてもいいのよ♪
そしたらこの楽しい拷問をまだまだ続けられるから♪」
「あふ……ん、んむ……！」
ハンコックに真実を語るつもりはもちろん無い。
けれど、こんな風に口を塞がれてしまったら声をあげたくても不可能だろう。
それをわかっていてサディは口内を蹂躞することをやめない。
真正正路の嗜虐趣味者だった。
ここでの拷問は被疑者が真実を語ったときに終わるのではない。
サディが飽きたときに終わるのだらう。



グモ

グモ

「結構 敏感なのね、ハンコックちゃん♪」

「う、ふあ、ふは……はあ、はあ……！」

上機嫌に言って、サディはやつと口内から指を抜く。

苦しげに息をつくハンコックを尻目に、

唾液で濡れた指をこれみよがしに舐め上げた。

「いい味よお」

息苦しかったせいで気泡の泡が混じっているハンコックの

唾液が本当においしくてたまらないといった風に丁寧に舐めていく。

「こ、この……変態めが！ 異常じゃぞ、そなたのしていることは……！」

「あらあら、まだ減らず口を叩けるのお？ そんな子には……こうよ♪」

サディの手が下半身へと伸びていく。

ハンコックの股間にするりと指が差し込まれた。

「な……！？ そこは！」

「ん、ん、これで蛇姫様もちよつとは静かになるかしらあ？」

「ん……んふあああ！？」

サディの指の動きは性急だった。

いきなり下着をおしのけて直接にハンコックの秘所を弄る。

そこにあるわずかな湿り気を確認するやいなやクリトリスをつまみあげた。

「あく……ひ、んあ、あ、あああ……！」

一番敏感なところに乱暴な愛撫を与えられ、

ハンコックは声を押し殺すことができない。

自分でも聞いたことがないくらい下品な声をあげてもだえてしまう。

「う、あ……ひあ、はあ、ぐ……うあああああ……！」

ざちざちと絞り上げるようなきつい愛撫。

「ん、ん、逆にうるさくなっちゃったわねえ。

ま、そんな風に鳴いてくれるなら全然いいんだけどお？」

やつと手を離し、自らの眼前に持ってくる。

そしてハンコックに見せ付けるかのように、

わずかな唾液で濡れて光っている指を一本一本口に含む。

「う……はあ、ああ、ひ……はあ……！」

（そ……そんなもの、舐めるな……！）

いつの間にかハンコックの視線は下から見上げて懇願するような形になっている。

サディはその視線を得もいわれぬ快感と共に受け入れた。

それは極上の獲物が、自らの立場、を理解し始めた甘美な瞬間。

貴様……！
絶対に許さぬ！
石にしてやる……

はあ！！

そんなこと
言いながら
カラダをビクビクさせて……
んっっかわいっ

もっともっと
いじめたく
なっっちゃう

「いっしょ」を
同時にするのが
一番なのね？

「んっっいいカオになってきたわね」
サディは蛇のようにハンコックにまとわりつく。
赤い舌をちらちらと見せて逗わせる。

「く……ん、ふあ……」

「ほんと、カワイイわあ」

肩を抱き寄せ自らの身体をこすり付ける。

サディの身体はうっすらと汗をかいてぬめっていて、それに何より熱かった。
興奮によって上昇した体温が直接にハンコックにも伝わってくる。

好きなものの体温ならともかく、そうでないものの体温はただ不快なだけ。

だから心は拒んでいるのだが、

ぬめった汗によって身体のはらは取り込まれてしまうようにも感じる。

「い……や……」

豊富な胸が合わさる。

サディの双丘に自らの胸が包まれる感触にハンコックは不快げに眉根を寄せた。

「ハンコックちゃんの一着脱すかしい瞬間を見せてっ」

言いながらサディは頬を舐め上げ、耳にまで舌を這わせた。

「あ……はあ、ああ、う……」

相変わらずたっぷりと唾液を含んだ舌が耳を蹂躪する。

その複雑な形にそって舌を這わせ、

くほみをほじくり返し、上から下へと徐々に降りていく。

「く……んっ、ふあ……」

そして耳孔へと到達すると、

可能なかぎり舌をすぼめて奥へ奥へと侵入させた。

「ずず、じゅちゅ、ずず……」

「あ、やあ、あ……く、うあ……」

耳から与えられる刺激で震える身体をサディは楽しげに抱きしめる。

まるでハンコックの内面ごと噴らうかのように震えを抱き止め、

自らの身体に伝播するのを感じていた。

「ふは……んっ、イイ反応だわあ……ひよっとして耳も性感帯……」

サディが耳から口を離すと涎が糸を引いた。

その糸が肩に垂れてひやりとした感覚をもたらし、

やっどハンコックの身体を覆っていた小さな震えが止まる。

「あ……はあ、うう……」

ハンコックは顔を伏せる。

こんな女の行為によって震えてしまったという事実が胸に重くのしかかった。



ハンコックが弱りかけてきたところにサディは更につけこむ。

「ん〜♪ ここはどうかしら？」

すると伸びた手が股間を這い、秘所を通り越し――。

「な！？ そ、そこは！！！」

あろうことかハンコックのアナルへと到達する。

「やめろ！ そなた、気でも狂ったのか！？」

「ん〜♪ サディちゃんは至つて正気よお♪」

ハンコックのうぶな反応にサディは気を良くする。

つぶ――。

そのまま指をハンコックのアナルへと差し込んだ。

「ひ！？ く、ああ……」

未知の何ともいえない感覚にハンコックはもたえた。

全身の毛穴が開いて一気に汗が吹き出てくるような独特の悪寒。

「ああ、うぐ、くふ……ふああ！？」

サディはお構いなしに自分の好きなように指を動かす。

左右に動かして入り口を徐々に広げ、第一関節まで指を埋める。

ず、ずぬぬ――。

「はああああああ？！」

そして一気に第二関節まで指を突き入れた。

「あ……が、かは――ふ、はあ、うう……！！！」

今まで感じたことのない強烈な圧迫感。

「ぐいぐい締め付けてくるわあ♪」

サディは艶やかに笑い、さらに指を動かす。

「やめ……やめろお！ そのような……不浄の場所に……く、ううああああつ！！」

抵抗しようと身をよじってもそれは自分で自分の首を絞めているだけだった。

サディが指先ひとつ動かせばそれだけでもうハンコックは喘かされてしまう。

いや、動かさずともじわじわと与えられる異物感によって

声が漏れ出てしまうはずだ。

「サディちゃんのちよつと伸びてる爪でここを引っかいたらどうなるかなあ？！」

カリ――。

「ひ！？ いあ、あく……ううう！！」

腸の粘膜をダイレクトに刺激され、またハンコックは悲鳴を漏らしてしまう。

「ん〜♪ お尻の穴をひっかかれてそんな声あげてるなんて……」

ハンコックちゃんのほうが変態なんじゃない？」

「ち、ちが、これはそなたが……！ はく、ああああああ！！」

「まあたそんな声あげちゃってえ……このメス豚！！」

ぐりっ――！！

アナルの中で曲げた指を思い切り折り曲げ、一気に引き出す！

「あ、か――あああああああつ！！」

哀れな絶叫が響く。

ぶ、無礼者ッ！
わらわに
このような……！！

んんん♪
まだ自分の立場が
わからないのお？

じゃあこの薬を
使うしかないわね♪

「そろそろあんた達にもさせてあげないと気の毒よね♪」
パン、とひとつ手を鳴らすと幾人かの男たちが現れた。

「な——！！？」
目を丸くするハンコックを尻目にサディは笑う。

「これも拷問の一環ってやつ？」
男たちはサディの許しを得ると一気にハンコックの肉体に群がる。

「ぶ、無礼者ッ！ わらわにこのような……！！」
「んんん♪ まだ自分の立場がわからないのお？ じゃあこの薬を使うしかないわね♪」

「魔獣もイキ狂う特製淫毒♪ コレでイッちゃって♪」
針の表面にはうっすらと毒が塗られているのがわかった。

「よせ！ よさぬか！？ もう——」
鼻れるハンコックの身体を男たちが抑える。

「んんん♪ まずは胸ね♪」
つぶ。

「あ、ああ——」

痛みの後にひやりと冷えた金属の感触。
さらにその後、刺された場所からざわざわと血管が沸き立つような奇妙な感覚——。

「ここにもおっ♪」
「ひぎ……！！」

乳首にも針を刺す。
胸のふくらみに刺されたときは比べものにならないほど大きな刺激が訪れる。

「ああ、はあ、く……うあ……ああ……！！」
「どんどんいくわよおっ♪」

膣の下、へそ、臍腹、恥丘——。
針を刺すたびにサディは凄絶な笑みを浮かべ、口の端から舌を垂れる。

ハンコックの悲鳴も反応も、針をさすことも楽しくて仕方ない。
そんな調子で何箇所にも毒を挿れていく。

「最後はここね」

声は熱く濡れていて、サディの頬ももう十分に紅潮している。
指先がひらめいてハンコックのクリトリスに最後の針が刺さった——。

「あ、あ——ひ、ぐ……うふあああああああああ——」
「んんん♪ つ、ふひ……！！ いううううううう！」

後へ後へと尾を引く悲鳴がサディの耳を悩ませる。
「んんん♪ んんん♪ たまらないわあ……」

どくどくとハンコックの股間から愛液が溢れる。
「あら、こんなに下品に垂れ流す穴は、栓をしておかないとねっ！」
最後にサディは特製パイプをぶち込む。

「あああああ、ひあ！？ ああ、うう……」
くっ、はっ、うう……はあ、ああ、あああう……！！」



毒に身体を侵され、パイプまで胎内に挿入された
ハンコックの限界は近かった。

男たちが愛撫し始めると簡単に性感が上り詰めていく。

「ああ……ああああ……もう、だ、めええ！」

パイプを少し動かされただけで嬌声上がる。

淫毒は速効性のもので、もう最大限の快感をもたらししていた。

身体の表面の皮膚がちりちりと張り詰めているようで、

全く身動きすることもできない。

ただ脱力して男たちとサディに身を任せることしか「抵抗」できない。

「ああ、はあ、うう……く、ひい……！」

男たちは思い思いの場所に舌を這わせて肉体の感覚を引き出す。

ぬめった舌の感覚が、時折さつき針の刺さった場所をかすめた。

すると男の唾液がまた新たな毒になったかのように

体内に侵入してくる感覚がある。

吐き気を催すような嫌悪を感じつつも、

けれどその生暖かさにどこか安心感を抱いてしまう。

（ダメだ……わらわはもう、狂わされてしまったのか……！）

あとからあとから下腹を突き上げるような快感が湧き出てくる。

「あひ……ふあ、あはあ、んあ……はあ、ああああああ……！」

もう耐えられない――。

心でそう認めてしまった瞬間に法悦が訪れた。

「ああああああ？！ はあ、や、うああ……つくうううう、

イク、ああ、イ……ク、んんんうっ！」

はあ、ああああああああああああああああああっ！」

びくびくと震える身体を男たちが押さえつけ、

サディが陰湿な笑みを漏らした。

「あ……はあ、うう……く、あ……！」

身体の運動を抑えられ、

ハンコックの絶頂は最大の高みまでは上り詰めることが出来なかった。

「あ、ふえ……え……っ！」

それを知っていてサディは舌を出し、ちろちろと自らの唇を舐め上げる。

「さあ、本番はここからよ……んっっ！」

んんん!!

はぁうらうら
うらうらうら!!

舌で
ハンコックちゃんの
アソコを
徹底的にイジメて
あげるわぁ♪

ちゅるる

「え……あ？ んんう……！」
サディの台詞と共に男たちが舌での愛撫を再開する。
「ああ……や、うくう……」
男たちが押さえつけていた力がゆるむと、
かくかくとハンコックの身体が細かく震え始めた。
「何……何なのじや、これは……!?!」
「イツたけれど、イキきらなかった……」
ハンコックの体内にたまった
びりびりとした神経感覚が全身に行き渡る。
それと同時に、
ウツウツウツウツ——!!
パイプが突如振動し始めた。
「んふああ!? ああ、は、や……あああああ!」
「この感覚……ま、またイク……!?!」
「あああああああ! はっ、や、んく……く、うああああああん!」
もはやハンコックの身体は彼女自身の意思とは離れ、
勝手に快楽を求め始める。
「いや……ああ、やああ……!」
「とめて、とめなさ……い、い、あ……はあ、ああ……!」
パイプは無慈悲に動き続け、男たちは秘所からあふれでる蜜に群がる。
「あ……あ、はあ、ううく……!」
「やめんか、そなたたち……はあ、こ、このような……
いやあああああああ!?!」
もう後半は言葉にならなかつた。
身体が強制的に押し上げられ、
連続する絶頂に理性を全て壊されてしまう。
「んんん」女王様そんな格好をさせられて……
ほんとみつももないわねえ、ハンコックちゃん♪」
サディはやや遠目からハンコックを見て悦に入り、
自分で自分を慰め始めていた。
「あふ……はあ、く……うう、はあ、ああ、ひ……
くふあ、はあ、ああああああ、イ……ク……!」
淫毒と快楽に侵されたハンコックは
もう自然に絶頂を伝えてしまっている。
幼児が用便をするときのような姿勢のまま何度もイキ狂わされ、
股間からは愛液の潮を吹かされる。
「あはあーっ、はあ、うう……くあ、イ……やあ、また、また……!」
男がクリトリスを舌でつついたことが台詞になり、また絶頂に達する。
大きな絶頂だけでもう既に四回。
小さなものも含めるともう数え切れないくらいだった。

サディちゃんに
嘘ついたらどうなるか
思い知らせて
あげないとねー♪

や……やめろ……!!
はあ……許さぬぞ……

はあ!!

んー♪
どお?
好きでもない男に
犯されるのは?

ああッ!!

「んー♪ そろそろメインディッシュの時間ねー」
サディは男たちを見回し、なかでも一番屈強で残忍そうな者を選び、言った。
「ハンコックちゃんに入れてあげて♪」
男は嬉々として頷き、後ろからハンコックに覆いかぶさった。
先走りに濡れたペニスをはくひくと震える秘所に押し当てる。
「いや!? ああ、やめ……!!」
「んー♪ ルフィ……? ああ、あの妻わらの?」
「……? し、しまっ……」
「サディちゃんに嘘ついたらどうなるか、思い知らせてあげないとねー♪」
その言葉と共に男が腰を前に進める。
ずぬ、ぐにゅ、ずず……!!
「あ、ああああ……ああああ、ひう……!!」
ずぶずぶとゆつくりと男のものがハンコックの膣内へと侵入していった。
「んー♪ どお? 好きでもない男に犯されるのは?」
「あ、あ、あひ、うく、ああ……!!」
男が腰を動かし始め、パンパンと尻と腰がぶつかる小気味良い音、
そして雄が鳴く小気味良い声が響く。
「や……やめろ……!! うう、ああ、はあ……許さぬぞ……んはああッ!!」
「じゃあ抵抗してみればいいのにい?」
ハンコックちゃんならこんな男、わけもないんでしょお?」
「く……はあ、うう……んあ、はあ、うく……あああああああ!!」
ずちゅ、じゅぶ、ぐじゅぶ……!!
サディが煽るのに合わせて男の動きがどんどん激しくなっていく。
「ああ、ひ……!! うあ、はあ……つくふあ、ああ、
い……ああ、はあう……くう……!!」
ハンコックが口を開いても出てくるのは喘ぎ声ばかり。
もう言葉にはならなかった。
あまりにも大きな屈辱と快楽に、
徐々にハンコックの感覚は薄れて膜がかかったようになる。



背中に感じる生暖かい体温。

「うああああ、はあ、やああああ！　いう……！」
股間から潮り入られ、下腹の奥を突かれる圧倒的な快楽――
再び現実が強くハンコックの前に迫ってきた。

「んゝゝ 結構頑張ったけど、残念だったわね」

「ふああ、あ、は――」

背後にいる男の身体が震えた。

どくどくと身体全体が脈動し、

下腹の奥に何か熱いものがぶちまけられる。

「ひ――！？　はっ、ああ……ふあああ、

あああ、や、な、なかで……！？」

あああああ、いやああああああああああああつ！！

男ががっしりとハンコックの身体を掴み、

背後から強く最奥に突き入れる。

「あ、や――ああああ、はな、せ……！」

ああああ、ふああ、奥に……出て……！」

ペニスの律動が完全に止まるまで男は

ハンコックを拘束し、全ての白濁を子宮内へと注いだ。

「う……うう、こ、こんな……」

ひっ、はあ、う……く、ふあ、ああ……」

うなだれるハンコックを尻目に男がやっつと身体を離した。
満足げな笑みを浮かべ――そして他の男を促す。

ん〜♪
どうお？
そうやって背中を
見ながら犯されるのはあ？

ハンコックちゃんが
大脱走に関わっていたのは
間違いないところだし……

今後も
こうやって
模範囚の慰安婦に
なってもらわわ♪

はっ！

あッ！！

ぐわ
ぐわ
ぐわ

「はあ、ああああ、やう……うう、くあああ！」
じゆず、ずじゆ、じゆぶ……！」

大柄の男がハンコックをしつかりと抱え上げ、また背後からハンコックを犯している。結合部からはとめどなく愛液があふれ床にまで垂れていた。

「んっ、どうお？ そうやって背中を見ながら犯されるのはあ？」
「うく……あ、ああああつ！」

サディをにらみ、何とか言葉を紡ごうとする。
だが男に突かれながら背中をゆっくりと撫でられるともうそれだけで舌がまわらなくなる。

「まあ、ハンコックちゃんが大脱走に間わっていたのは間違いないところだし……、今後もこうやって模範囚の慰安婦になってもらうわ！」
「う……い、ああああ、や、ああ……！」

歓声をあげる男たちとは裏腹にハンコックは力なく首を振る。
「んっ、背中新たな隷属の証を追加してあげるのもいいわね！」

「い……や、ああああ、はあ、くうん！」
ハンコックを貫いている男の動きが徐々に激しいものになる。

どうやらサディの言葉責めによって膣の締め付けが増したようだった。
「手伝ってあげるよ！」

必死に腰を動かしてハンコックを犯す男を見て、サディも興が乗ってきたのだろう。
自らのヒールのかかとを二人の結合部に差し込む。

「あ……ふえ、え……！」
「んっ、ここもいいんですよ？ さつきよがってたものね？」

ヒールのかかとはハンコックのアナルを挿る。

「あ……あ、あああ、うく……あああああつ！」
「イキなさい、メス豚ちゃん！」

ずく……！
アナルに大きな異物感。

「あああああ、ああ、い……うあああああ！」
同時に強い締め付けにあつて男も絶頂を迎える。

びゅく、びゅるぶつ、どぶ……！
（ふたつ……同時はもう……だ、めえええ！）

「あはあああん！ うう、はあ、あああつ、く……うう、あい……い、あ、うう、いく、いく、イクイクイク……！」

あああああああつ！」

頭のなかで今までにないほど大きな光が明滅する。
全身をびくびくと震わせながらハンコックは今までで最も大きな絶頂に達していた。

「あ、ああ……うう……はつ、あ……」
もう膣内は男の精でベトベトになり、熱く滾っている。

（お尻の穴も……熱くって……）
「は……ああ、うあ……ひう、はあ、はあ、はう……ん……」

「んっ、これからが楽しみ！」
床に這いつくばり、力なく背中をさらしているハンコックを踏みつけてサディは囁く……。

ジュエリー・ボニー編

ボニー海賊団は海軍の襲撃にあつた。

海軍の巧妙な作戦と物量に対抗する手段はなく、ついには船が沈没してしまふ。

ボニーは手近なところにいる部下を集め、なんとか小型ボートで逃げ出す。

船が轟沈する混乱に乗じてうまく海軍の包囲を逃れることに成功した。

だが、もうすこしで陸に着こうというところで小型ボートは破損。

悪魔の力の持ち主ボニーは海に入ると力が出ずに沈んでしまふ。

あわててボニーを助ける部下たちだったが……。

「うぶっ……げほっ、ごほ！」

「お、おかしら！ 大丈夫ですかい？」

沈みかけたボニーの身体を屈強な男が抱えあげた。

もうだいたい陸は近く、浅瀬とっていいほどだ。

あと少しだけでも陸に近づけば、ボニーも自分で立ち上がることができるだろう。

だが———まだ今の段階では力が入らないらしいことは、ボニーの若干青ざめた顔からもわかる。

能力者にとってやはり海に沈むことは大きな恐怖なのだろう。

「ほら さっさと引き上げろ！」

強気に言うボニーだったが、その声には少し焦りが含まれている。

「まったく、ここまでボートを漕いできたのも俺たちなんだからちよつとは感謝してくれてもいいのに」

「ほんとだよ、船はあんなことになつちまうし、俺たちいつたいこれからどうすれば……」

男たちは天を仰いだ。

ボートで流れ着いたこの場所はどうやら無人島らしい。

これから助けを持つほかないのか———そう思うと男たちの気分も沈んでくる。

「うるさい！ いいからさっさとしろ！」

そのうえ船長は高飛車で自分たちを氣遣うそぶりも見せない。

男たちの胸中にふつふつとやりばのない怒りや面白くない想いが浮かび上がってくる。

「へえへえ、わかりましたよ！」

ザバツ、と勢いよくボニーの身体を持ち上げる。

すると———

「……………」

一人の男がごくりと生唾を飲み込んだ。

それに釣られて他の男もボニーを見る。

海水に濡れ、脱力した女の肢体。

大きめの胸と尻、くびれた腰。

細い喉にすらりとした腕と脛。肉付きのいい太股……。

またもうひとつ、誰かがごくりと生唾を飲み込んだ。

海軍の攻撃から命から逃げ出して、なんとかこの島までたどり着いて———

男たちの身体は震れ切っている。おまけに数時間前まで生命の危機を感じていたのだ。

その緊張感と興奮はまだ精神に焼き付いており———目の前の女の肉体に強く反応する。

船長っていい
カラダしてますよね

ホント
水に濡れて
すっごくエロく
なってますよ

はあ！？
何言ってるんだ
 temeエラ！

へへっ……
どうせ助けが来るまで
当分はこの島から
出られそうにねえし……

たっぷり
楽しみましょうよ
船長

「船長っていい
カラダしてますよね」

「ホント水に濡れてすっごくエロくなってますよ」

一瞬、ポニーの顔が呆ける。

自分の部下が何を言っているのかわからない。そんな表情だった。
だがすぐにその無防備さは怒りに覆い隠された。

「はあ！？」

何言ってるんだ
 temeエラ！

部下の目の色が完全に変わっているのを理解し、

ポニーは怒鳴り睨み付ける。

だが、もう部下たちは、ポニー海賊団の一員、

としての顔を捨て、ひとりの男、としての下卑た表情に頬を歪ませる。

「へへっ……どうせ助けが来るまで当分はこの島から出られそうにねえし……
たっぷり楽しみましょうよ、船長」

その言葉に男全員が頷き、ポニーに好色な視線を浴びせる。

「 temeエラ……タダじゃおかねえからな！」

「わかっているですよ。威勢が良いのは口だけってことはね！」

ポニーを吊り上げている男が手首を締め上げる。

「くっ……！」

普段はこの程度の痛みに対応してしまふことはない。

けれど今は海水によって力を奪われていて、十人並みの女の反応になってしまう。

「いい声も出せるじゃないですか！」

男たちはその声に喜色満面になる。

ポニーが無力なことを実感し、

弱者を虐げることが出来る喜びが表情になっっているのだ。

「久々の女だ……。ちよっとキツいかもしれませんが、

よろしく頼みますよ、船長。」

からかうような口調で言い、男はニヤニヤと笑う。

対するポニーは頬を紅潮させて怒っているが、

その唇は無力さにわなないてもいた。

なっ……！？
おい！
何考えてんだ！

へへ……
船長のこころ
すべすべで
たまらないっすよ

やめ……
やめろお……！

おお……
やわらけえ胸だ

男たちが近づいてきて、ポニーの身体を触り始める。

「う……くう……！」

海軍との戦いで消耗しているうえに、海に半身浸かっているせいで全く力が出ない。

「やめ、やめろお……うう！」

いやいやを力なく身をよじるだけが今のポニーにできる精一杯の抵抗だった。

「こんなチャンス二度とねえよな」

「なっ……！？おい！ 何考えてんだ！」

ポニーが抵抗できないとみるや、男たちは本格的にその媚肉を貪り始める。

「おお……やわらけえ胸だ」

一人の男がふくよかな胸の稜線を指でなぞり弾力と張りを確認する。

そしてするすると指を滑らせて胸の先端を押す。

「んふあ……！」

思わず情けない声を出してしまい、ポニーは羞恥に頬を紅潮させた。

「は、バカにするな！ ……ひあ！？」

大声を張り上げて嗔呵を切るが、別の感触にまた情けない声をあげてしまう。

「く……うあ……、な、なにしてんだ！？」

「へへ……船長のこころ、すべすべでたまらないっすよ」

見ると、もう一人の男はポニーの腋に舌を這わせている。

柔らかな腋と二の腕の感触を存分に楽しむかのように、

舌と唾液をべつとりと貼り付ける。

「く……うう……！」

あまりに気味が悪い、おまけに今までに経験したことのない感覚。

そんな場所まで性欲の対象になってしまうことに怖気を感じてしまう。

「こ……のお！ 離れろ、バカッ！」

男はポニーの反応を見て更にねつとりと舌を這わせる。

「おっと……こころも反応してきましたね。クク、腋なんかで感じるんですかい。」

男はホットパンツの脇から指を差込んで秘所を弄ぶ。

そこは確かに海水以外のぬめりを帯び始めていた。

「ち、違う……！ そんなわけないだろ！？ そんな、腋でたなんて……！」

「じゃあこれは何なんですかねえ？」

明らかにポニーを嘲り蔑む調子で男は言う。

その言葉には日頃こき使われていたことへの意趣返しも含まれていた。

「あ……い、ん……！」

じゅぶ、ちゅば、じゅぶ……！

腋を弄る男はわざと大きな音を立て、ポニーに意識させる。

異常な場所を弄られ、ポニーの感覚がだんだん狂わされていく。

「やめ……やめろお……！」

必死にあげた声はもはや海賊団の船長としての貫禄がみじんも感じられないものだった。

さつきから
ここをつまんでやると
やけに反応がいいな

ひよつとして
乳首
弱いんですかい？

く……
やめろ！

見るな！
触るなあ！！

ハハハ

ハハハ

「テメエら殺されてえのか！」

「そんなヘロヘロの状態で言われても何も怖くありませんよ」

「男たちはエゴイスティックにボニーの身体を責る。」

「海水に浸かっていた肌は腐臭く堪辛い。」

「だがそれ以上にすべすべとした瑞々しい感触を伝えてくる。」

「こうなつちやえは海賊ボニーといえどただの女つてところですかね？」

「こんなことして……後で、どうなるか——」

「ハッ！ 俺たちには後も先もねえんだよ！」

「く……痛つ……！」

「男が力をこめると、また普通の女の子のような反応を返してしまふ。」

「そしてボニーの豊満な胸を下から持ち上げる。」

「つたく、何食べたならこんなにかいバイオツに育つかねえ？」

「何でも食べてるからじゃないか？」

「ハハハ、確かに」

「男たちは完全にボニーをバカにして乳房をまるで玩具のように扱う。」

「わしづかみにして握りつぶし、胸の谷間に指を差し入れて圧力を感じる。」

「う……あ……」

「時折気まぐれに先端を押し、するとそれだけでボニーは声をあげてしまふ。」

「ねえ船長、一発やらせてくれませんか？ いいでしょう？」

「な、何をバカな……！ テメエ正気か！？」

「この状況でやることを考えねえやつのほうがおかしいと思いますけどね？」

「男は思い切り強くボニーの乳首をつまみあげた。」

「ああ……！ く、い、あああああ……！」

「ひよつとして乳首弱いんですかい？」

「男の指が伸びてきて、ボニーの乳首をピンとはじいた。」

「う……く……！」

「指が素早く動いて何度も先端をはじき、弄ぶ。」

「あ、や、ああ……く、んふあ……ああ！」

「（なんて……我慢してるのに、声が……！）」

「ボニーの反応を楽しみつつ、男はまた臍に舌を這わせた。」

「ひやあああ……！」

「おぞましい感触に必死に抵抗するが、身体は全く動いてくれない。」

「さて……そろそろナマの感触を楽しみますか？」

「タンクトップがずり上げられてボニーの上半身があらわになった。」

「「ヒュウ！ たまんねえなあ、ええ？ 海賊線業に忙しくて、船長はあんまり遊んでないんですかい？ 綺麗なピンク色じゃないですか」

「肌も毎日潮風を浴びてるとは思えない……吸い付いてくるみたいだ」

「水に濡れた素肌に男の視線が突き刺さる。」

「く……やめろ、見るな、触るなあ……！」

「その必死の叫び声も今の男たちにとっては甘い旋律だった。」

感じてるときの声は
普通の女の子
みたいですね
船長

バ：バカ！
テメエらの
ヘタクソな愛撫で
感じるわけ…んっ！

はあうッ！

船長が
すんなり
やらせてくれてたら
こんな乱暴なことは
しなかったのに

ふざけんなっ！
誰がテメエらみたいなの
雑魚と…

んっ！！

時間が経つにつれてポニーのあげる声の質が徐々に変化し始めていた。
「んあ……くはっ、ふ……うう、ああ、やあ……」
どことなく艶っぽく、また戸惑いや憂いを含んだ独特のあえぎ声。
それは男に嗜虐心を抱かせるものでもあった。
「感じてるときの声は普通の女の子みたいですね船長」
「バ：バカ！テメエらのヘタクソな愛撫で感じるわけ…んっ！はあうッ！」
「船長がすんなりやらせてくれてたらこんな乱暴なこととはしなかったのに」
「ふざけんなっ！誰がテメエらみたいなの雑魚と…んんッ！」
肉体的にはとっくに限界に来ているが、
精神はまだ長としてのプライドを保っている。
「そんなこと言ってもねえ……もうここはくちよくちよくないですか」
「んあ……！ やめろ……はあん！」
ホットパンツに左から指を差し込んだ男がポニーの陰唇とクリトリスを刺激する。
そして右から指を差し込んだ男はアナルに指を這わせた。
「ここまで垂れてきてるんじやないですかい？」
「こ、こちらあ！ そんなわけな……はなせっ！ ああっ！」
ポニーのアナルはきつくすぼまっていて、男の野太い指を入れることはできない。
だが、そうやって普段は絶対に他人に触られない場所を刺激することは、
プライドの高い女には効果的だった。
「うく……はあ、い……やあ、ああ、はあ……！」
ポニーの視界のなかには二つの男の頭がある。
どちらも半ば夢中になったように乳首に舌を這わせ、赤子のように吸い付いている。
おぞましいものを見るかのようなポニーの視線。
だが何より情けないのは、自らの身体が男の玩具に成り下がっていることだった。
「く……ううあああああっ！？」
胸に与えられるじりじりとした刺激が時折大きな変化を起こし、
ポニーの頭のなかで白くスパークする。
「ああ、はあ、はう……はあ……」
そしてそのスパークが収まるとまたじりじりとした刺激に戻り……
そしていつかまた刺激が白い変化を起こす。
ずっとその繰り返しだった。
（ダメだ……こんなの、頭がおかしくなる……）
やわやわと与えられ続けている秘所と後ろの穴への刺激も
ポニーを確実に追い詰めていた。
「く……んふ、はう……ひっ、ああ、やあ……」
（おっばいとあそことお尻、同時に刺激されたらあ……
だ、だめ、こんなの、おかし……！）
何か恐ろしい感覚が背筋を上ってくる――。
その寸前でポニーは激しく身をよじった。



「ま……待て……！ 分かった！ 一回やらせてやるから……！」

その声はほとんど悲鳴に近かった。

船長が手下に何かを許すという調子ではない。

下の立場のものが、上にいるものに懇願するような調子。

「いつも食べることしか頭に無いバカな船長でも

ようやく今の状況が分かってきましたか？」

「く……！」

自分の手下といえど、こんな雑魚の三下にそこまで言われなければいけないのか。かっとなりがわいて手を出してしまいそうになる。

いや、いつもなら考えるよりも先に張り倒していただろう。

だが今は身体がほとんど動かない。

張り倒そうとしても腕がびくりとひとつ震えただけだった。

「くそ……調子に乗りやがって……！」

「調子に乗ってるのは船長のほうじゃないですか？」

ここをこんなにしておいて、まだそんな減らず口を叩く

大男のひときわ太い指がボニーの膣口を覆う。

そして十分に濡れそぼっているそこを身勝手にかきまわした。

「ん……く、あああ、いやあ……！」

繊細さのかけらもないただ強引に指をなすりつけるような愛撫。

包皮ごとクリトリスを押し潰し、陰唇を巻き込むようにして膣口を弄る。

「ひう……！！ はあ、やあ、く……うう、んああっ！！」

しかしそんな乱暴な愛撫にも今のボニーの肉体は反応してしまふ。

男の指がかき回すたびに新たな愛液が漏れだし、飛沫になって散った。

ホットパンツの脇からも愛液がどんどん垂れ、ふとももを淫らに光らせる。

言っときますけど一回ヤツたくらいじゃ終わりませんよ

この後
船長はオレらの
ベットになるん
ですからね

な……！？
べ、ベットだと！？

は、離せ……！
絶対に許さないからな！

覚悟しとけよ……
回復したら
お前らなんか！

はあ！！

「言っときますけど一回ヤツたくらいじゃ終わりませんよ」
ポニーの様子を見、

男たちの興奮も最高潮に達しようとしていた。
皆スポンのなかで己のものをギンギンに勃起させ、
獣欲にたぎった視線でポニーの股体を射抜く。

「この後船長はオレらのベットになるんですからね」
一人がそう言うと、残りもそれが良いとばかりに頷く。

「な……！？ べ、ベットだと！？」

今の状況を半ば諦めかけていたポニーだが、
その言葉で目が覚める。

「は、離せ……！ 絶対に許さないからな！

覚悟しとけよ……回復したら、お前らなんか！」
鼻れたそうとするポニーだが、相変わらず身体には力が
入らない。

口で言っていることだけは威勢が良いが
身体の動きはといえばほとんど悶えているだけだった。

（くそ……！ ほんの少しだけでもいつもの力が出れば、
こいつらなんて……！）

「へへ……まあ大人しくしてくださいよ」

男たちはいよいよ自分の機位を確信し、
仕上げとばかりにポニーの身体に手を伸ばす。

「ここはこんなになってるんですからねえ、
もうちつと素直になつてくれたほうが
こっちとしても嬉しいっすね」

「いや、オレはこういうのも案外好みだけどな」
「ガハハ！ オメエはほんとに変態だなあ！」

口々に勝手なことを言いながら男たちはポニーの
身体を蹂躞する。

一人が胸を吸い、

もう一人が膣を舐め上げるとそれだけで嬌声が上がった。



「ああ、はあ……ひあ！？ う……はあ、んん……ふっ、はあ、く……」
ポニーも歯を食いしばって必死に耐えるが、

もう身体は十分に高まっていて感覚を押しとどめることはできない。

「さて、船長はクリトリスとマ○コ、どっちがいいのかね？」

「やめろ……くあ、はあ、ひん……！」

男が指を巧みに使い、腔内に指を挿入しながらクリトリスも刺激する。

「は——ああ、やあ、ああ……入って……うう、はあ、ああああっ！」

「ほう、意外ですね。遊んでないくせに、中のほうが感じるなんて」

クイッ——。男が腔内で指を曲げるとポニーの身体が海老のように跳ねた。

「あああ、ひやああうううう！！」

「ここですね？ わかりやした」

「ぐちゅ、ちゅふ、ぐちゅ——！」

男が腔内のある一点を指の先で押し続けながら、

挿入する指の本数を増やして腔壁をかき混ぜる。

Gスポットを集中的に責めあげられてポニーは切なげに目を伏せた。

「ククク……ここがそんなにイイんですかい？ そんな女みたいな表情をして」

「あああ、はあ、ひ……や、やめ……もう、こんな……！」

「はあ、あああ、ダ……メエ！」

ポニーの身体がひときわ強く震えた。

「ああ、う……く、はあ、ひう……！」

「い、や、だめ……い、く、いく、イクイク、イ——クウウウウうう！」

男の指が深く差し込まれたのを合図にして、

ポニーの上半身が大きく跳ね上がった。

今までにないほど大量の愛液がふきだし、男の手を濡らす。

「あ——はあ、ああ、う——く、はあ、はあ、はあ……！」

もはや恥も外聞もなく、

ポニーは男たちの視線のなかで絶頂に達してしまっていた。

おお……
褌が絡み付いて
くるみたいで……
船長のココは最高つすよー

やあ……ま
待っ……てえ！
激しく……されると……

待っなんて
無理ツスよ！
こんな具合の良い穴で
ちんたらして
られやしませんって！

あぁッ！！

他のメンバーに
悪いなあ
オレらだけ
こんなオイシイ
思いさせて
もらっちゃって

オレなんか
船長のカラダ目当てで
この海賊団に
入ったからなあ

く…… teme έρα
本気でそんな……

「さあ、真のお楽しみはここからですぜ」
男は自らの下半身を露出させ、ポニーの膣口にあてがう。

「いや……やめろ、それだけは……！」

「一発やらせてくれるって言ったのは船長でしよう？」

「あひっ——いやあああああああ……！」

喋りながら男は一気呵成にポニーを買いた。

みちみちという音が聞こえてきそうなくらい、ポニーの秘所を押し広げている。

「これが1億4千万の女の●●●か！」

「く……き、キツ……はあ、あう……！」

悦に入っている男とは対照的にポニーはまだ苦しげだった。

だが、男はそんなことには構わず自分勝手に動き始める。

「おお……褌が絡み付いてくるみたいで……船長のココは最高つすよー！」

「ああ、はあ、やあ……ま、待っ……てえ！ 激しく、されると……ああ、はあ……！」

「待っなんて無理ツスよ！ こんな具合の良い穴でちんたらしてしませんって！」

「く……ふああ、ああ、あく……や、ん、くう……！」

ポニーの膣内は十分に濡れそぼっている。

けれどあいにく男のものが大きすぎるのだ。

圧力で行き場をなくした愛液が結合部からだらだらと漏れ出す。

「他のメンバーに悪いなあオレらだけこんなオイシイ思いさせてもらっちゃって」

「オレなんか船長のカラダ目当てでこの海賊団に入ったからなあ」

「く…… teme έρα、本気でそんな……はあ、ああ、やあ……うう……くはあ……！」

ポニーが口を開くと男が腰の動きを激しくする。

「おっと……船長、もう出そうですぜ？」

「え……いや、何を言ってる……！」

「海で女日照りが続きましたからね……濃くてドロドロの口が出ますよ……！」

「やめろ！ ま、まさか……なかに出すのか……？ それだけは絶対にやめ——」

「うおおおおおっ！」

「ひっ！？ううう……ゆ、許さないからな！？ 本当に、なかでだしやがったら」

ポニーの制止の声は全く意味のないものだった。

ずちゅ、ぶじゅ、ぐじゅ……！

男の腰の動きがどんどん激しくなっていく。

「おお、お……で、出る……！」

どちゅ……！

男が腰をひとつ強く打ち付けて、ポニーの最奥に自分自身をみっちり押し当てた。

「あ、は、あ——うあ、や——」

「いやあああああああああ……！？ で、出てる……熱い、なかで疑われて……！」

びゅく、びゅるっ、びゅるる……！

「あ……は、く……ああ、はう……うう、んく……はあ、はあ、やあ……！」

膣内を白濁でいっぱい満たされ、ポニーは二度目の絶頂を迎えた。

く…… temeエら
卑怯だぞ!
こんな……

眠ってる間に
パイプも入れさせて
もらったんですよ

何しろ相手は
船長ですから
念には念を入れてね

くそっ……!
後で絶対殺す!

へへ……
無駄ですぜ
海軍特製の海棲石の
拘束台ツスからね

船長みたいな
じゃじゃ馬を
黙らせるための
拘束台でさあ

「うあ、ん……」
あれからどれくらいの時間が経ったのだろうか。
目覚めたポニーはまず自分の身体の力が戻っているかどうか確認しようとする。
「うう……」

ダメだ。まだほとんど力は入らない。

いや、ただ力が入らないだけでなく、腕が拘束されているような……。

「……!?!」

「お目覚めですかい、船長」

「て、 temeエら……はあ、くうあ!?!」

「へへ……無駄ですぜ。海軍特製の海棲石の拘束台ツスからね。

船長みたいなじゃじゃ馬を黙らせるための拘束台でさあ」

男の言葉の通り、今の力の入らなさにはさつきまでとは違っている。

「く…… temeエら、卑怯だぞ! こんな……ああ、はあああん!?!」

下腹の奥から突如湧き上がる奇妙な高揚感。

「あ……はあ、や……な、なにを……!」

ふわふわと身体が浮いてしまいそんな快感にポニーは身体を震わせる。

「眠ってる間にパイプを入れさせてもらったんですよ。

何しろ相手は船長ですから、念には念を入れてね」

ウイイイイイイン……。

何か圧倒的な異物感が胎内から感じられた。

「く……うう……あ……ふ……」

ここで声をあげてしまったら男たちの思惑通りになってしまう。

そう思っただけで必死に声をかみ殺す。

「おや? 頑張りますね。けどそれはオレたちにとつちやどつちでもいいんですよ」

男がポニーの尻の前でしゃがみこみ、パイプをくいくいと押した。

「う……ああああ!?!」

圧力が高まると瞬間から白く濁った液体が漏れ出す。

「こ、この感触……もしかして……」

「へへ、さつきオレが出した精液と船長のマン汁が混ざって……すげえ匂いですが?」

あろうことか、男は自らの精液をポニーの胎内に馴染ませる目的で

パイプを使っていたのだ。

「くそっ……!後で絶対殺す!……んん!」

三下の雑魚の精液を擦り込まれてしまった……。その嫌悪感に思わず吐き気を催す。

「眠ってる間中、コレ入ってたからもう充分湿ってるな」

別の男がつぶやいてパイプを抜いた

どろりとした塊となって精液と愛液がこぼれ落ち、

ポニーの腔口がぼっかりと開いたままになる……。



間髪を入れず、男は自らの剛直を挿入した。聞き切っていた膣口はベニスをくわえ込み嬉しそうに愛液を垂れ流す。

「なるほど……確かにこれは具合がいいや」

「ふちゆ、くじゆ、じゆふほ——！」
愛液は十分すぎるほど分泌され、膣肉もパイプで程よくこなれている。男にとってもポニーにとっても快楽はいや増す。

好き勝手に突きこまれているのに下腹の奥がだんだん熱く痺れてくる。

「やめろッ……くうっ！」
「もつと可愛らしく、やめてください。って言うんだったらやめてあげなくもないですよ」

「……………ッ」
男たちの下卑た笑い声。

ポニーは唇を噛んで耐える。

男たちのやりとりで逆に現実には引き戻される。もう自分は男を受け入れるほかない。改めてその事実気づかされる。

「ああ、はあ、や——うああ、ひあああ！」
男は相変わらず乱暴にポニーの膣内を突く。

何度も何度も、執拗に最奥に亀頭を接触させて性感を引き出し続ける。

「あふ……く、お、あ……あああああ！」
海棲石によって全身が脱力していることも快楽を高める一因になっていた。

「うく……ひ、はあ、うう……く、あああ……はあ、はあ……」
さつきからもう小さい絶頂は繰り返して何度も訪れている。

そのたびに膣肉は強く収縮し、男を喜ばせた。

「く……あ、イ……ク……ああ、はあ……！」
男のものも締め付けに応じて大きさを増し、その快感でさらに膣壁がうねり、締まる。悪循環以外のなにものでもない。

「ああくあ、ふう、はふ、ひん……！ ああ、やあう……」
「さつきから何度も締め付けて……こつちもそろそろ出そうですよ」

男のストロークが強く激しいものになっていく。

「く……や、だめ……！ これ以上、なかには……！」
「もう止まりませんよ……く、ううおとおおっ！」

「だめ、だめだめだめ！ やめろ！ ああ、また、熱いのがあああ！？」
「びゆく、どびゆく、ぶびゆる——！」

「あ……か、は……あああ、あう……く、ふあ、あああああ……」
男のものが最大限にまで隆起し、膣内の最奥で震えている。

心臓の脈動に合わせて熱い白濁が何度も何度もふき出し、子宮内にべつとりと貼りつく。

「あああああ、く……うあ、あはあ、や、あああああああああああああ！」
膣内を余すところなく汚されてポニーはオルガスムスに達した…。

あとがき

ポニーの敗北

ジャンプ本誌であれほどのシーンを出されたのであれば描くしかないでしょうという感じで描きました。

ジャンプを手にとってレジに持っていく途中にチラッと見たときあまりの工口さにビックリしました。

1コマ目で足をだらしなく開いているポニーが
2コマ目で黒ひげに見られているのを意識してか足を閉じるころや

あれだけポロポロにされて鎖で拘束されてるのに「ガシャン ガシャン」みたいな まだまだ抵抗しているらしき効果音が出ているところなど

すべてが工口かったです。

ジャンプであそこまで工口いシーンを見たのは久しぶりです。しかも漫画界の最高峰である作品でやるというのがすごいです。

部下にやられるパートは J-Girl. FIGHT 3 のときに

かいたポニーのシナリオを元に再構成したものです。

とりあえずアクの強い黒ひげ海賊団だけでは絵がもたないかな～ということ

部下たちのシーンを入れることにしました。

女ヶ島

今回は作画でとくに気をつけたのはアゴのラインです。

ワンピースストロングワールドの作画のときに尾田先生が

特にアゴのラインに関してこだわりをもって注文をつけていたそうなので、アゴのラインには気をつけて描きました。

ストーリーに関してですが 私の中ではなんとなく

「蛇姫の入浴をのぞきにいった変態女たちが烙印を見てしまって石にされ、石にされた状態でみているHな夢」というつもりで描いたのですが夢オチだと最後にテンションが下がる という意見も多くあったのでそこは白黒はっきりとさせずにフワッとした感じにしておきます。

各自 好きなように解釈していただければよいかと思います。



女海賊敗北総集編

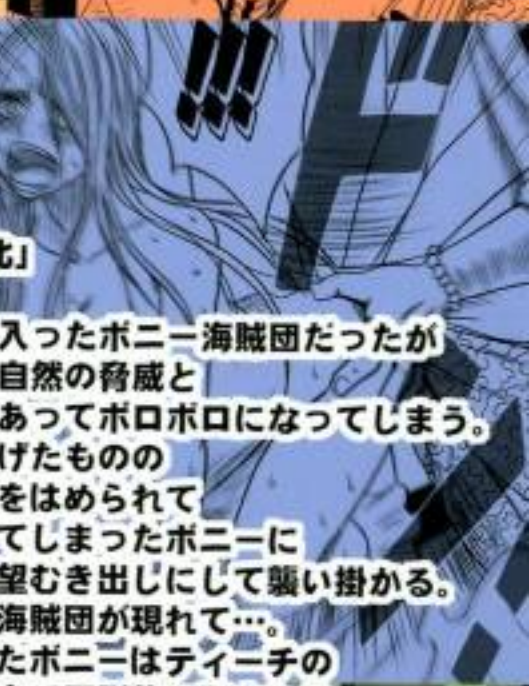
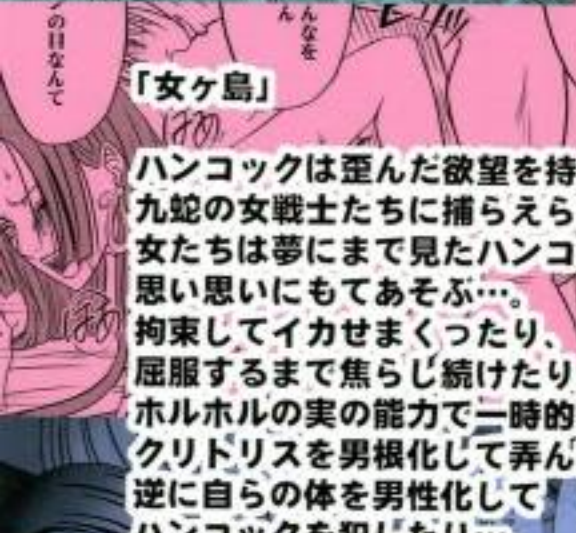
2012年8月15日 初版発行

発行者 クリムゾン

印刷 大陽出版株式会社

<http://www.alles.or.jp/~uir>





「女ヶ島」

ハンコックは歪んだ欲望を持った九蛇の女戦士たちに捕らえられてしまう。女たちは夢にまで見たハンコックの体を思い思いにもてあそぶ…。拘束してイカせまくったり、屈服するまで焦らじ続けたり、ホルホルの実の能力で一時的にクリトリスを男根化して弄んだり、逆に自らの体を男性化してハンコックを犯したり…。

「ポニーの敗北」

“新世界”に入ったポニー海賊団だったが予測できない自然の脅威と海軍の襲撃にあつてポロポロになってしまう。命からがら逃げたものの海楼石の手錠をはめられて戦えなくなってしまったポニーに部下たちが欲望むき出しにして襲い掛かる。そこに黒ひげ海賊団が現れて…。すべてを失ったポニーはティーチの悪魔の実の能力で圧倒的に犯される。



「ポニーの敗北」「女ヶ島」『J-GIRL』 FIGHT3 (ポニー編 ハンコック編) を収録。